続七部集

911.32
八
上

八雲龍守
一葉舎仙蒐　校訂

校正 七部集

東昌軒藏板

凡例

一世に俳諧のおこなはるゝ事今のごとくなるはなし其
は芭蕉翁正風の一道を世にひろめんとせしより其
門人の誰かれとなく撰集なせるもの多かりしを
は祖翁のおもむきを失はんと嘆く者多かれども能濫と
をつゝしまず今流布の印本は多く粗漏にし
て書写の誤多く是か為に句意さだかならず或ひ
は拙くしてむかしよりの書は元禄のすがたに
もとる真蹟及び諸集を参考し諸家の高説によ
りて悉く誤を正して故に校正七部集と号す
一仮字づかひは古学に因て正さるゝといへども俗談便
言にいたりてはしひて正さず唯音の近きによるものは
一詩題のたぐひは元禄の古板といへども誤写
あるは本書に就て正ぬ
一校正ちからを尽せりといへども猶誤ありとて草庵に
抑てとふ人あらば速に改正すべし
年辛亥孟春あたり大城のもと中橋の辺に
すまひまつる

[illegible]龍守

乾の巻

春の日　初丁より六丁まで　荷兮撰　（朱書：貞享三丙寅年集）
冬の日　七丁より十二丁まで　（朱書：貞享元甲子年集 尾張五歌仙）
ひさご　十三丁より十八丁まで　（朱書：元禄三庚午年集 珍碩撰）
猿蓑　十九丁より四十三丁まで　（朱書：同四辛未年集 去来 凡兆撰）
續猿蓑　四十四丁より七十丁まで　（朱書：同十一戊寅年集 同）

坤の巻

阿羅野　初丁より三十八丁まで　荷兮撰　（朱書：同二己巳年集）
炭俵　三十九丁より六十二丁まで　（朱書：元禄七甲戌年集 野坡 孤屋 利牛撰）

春の日

曙見んと人々の戸扣あはせて
熱田のかたにおもむきぬ渡し舟さはかしく
しかりし並松のかたも見えわたり
ていと殊勝なり重五が枝折をかける
竹墻かたちかきにあゆみよりて市中の
家しきにおもむかんと出侍る

二月十八日　荷兮

春めくや人さまざまの伊勢まゐり　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時に舘立て　雨桐
鐙ならぶる太鼓あるなり　李風
志る風にちらしきけるを踏分て　昌圭
くらりと沖の岩黒くみえ　執筆
須磨寺に汗の帷子脱かへん　重五
物かくし疑ひはらし　荷兮
文王の事は中々ふるくしも土つちくく　李風

雨の雫の角のなき草　雨桐

汎宴に一度ハ骨をれて世に　荷兮

傾城乳をのむ君呼　昌圭

霧ちらし清ふ人の歌うつし　雨桐

わたしらぬ祈輿のく里　重五

手居より半道奥の砂行く　昌圭

花に若男の帶きるあるは　李風

極よさ淺くちらに鞠ふまや　重五

入かる月の嬉いそくなり　荷兮

うりりを麦ふくる家に連ぞて　李風

このた情なり梓きくゐる　雨桐

呂鼓とたぬめるわらに切おし　荷兮

いともうしろきみ位の針を　昌圭

松の木ふ家囲う門ハうつらかく　雨桐

もろしの紅色りそぬ時るそ　重五

朝朗豆腐をきるにちらるる　昌圭

念佛さふるに秋あきなり　李風

穂蓼生ふ藏を須ひ手僅あらく　重五

家名を橋の名によべる日　荷兮

傘の内を付ふちよる雨の音に　李風

紙燈おろす出家わりなく　雨桐

ウ

花さきし頃西行ふるを聞まぬん　荷兮

殉癖ひら川を二人して渡る　昌圭

世にあそぬ高瀬に岸よりかゞる　雨桐

詫念にもらふ藤織の菅畑　重五

いぐまと花と行とふいそろしく　昌圭

芽ノカ見ど色ゑるとりにゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁

おもしろふかすむかたちの滝　野水

春の旅節供なるらん袴着て　荷兮

はそくつさ清みなかの節　越人

松風にたまらぬ絃の滝の破　羽笠

賣のとしつる毛それ川月　執筆

笠白き太秦祭過にけり　野水

菜あるゝ垣によのぞく人くわく　旦藁
喜町中川とて二人髪剃ん　越人
咲くのり車ゆくさち　荷兮
鐘鋳つく大津の浜にかゝる月　旦藁
何やらむ家中の奥　越人
疏言あらためりと詠やりて　羽笠
萩ふみたふす万日のはら　野水
里人に薄とわけし秋の風　越人
身なしき浪り重石かく猪　羽笠
古ろしくる市の梢に花の結さん　野水
諷うたひたる江の須の山　旦藁
二
のとくしや荒芒の徒伊勢の常　越人
肉侍のえらふ代々の眉の園　荷兮
おふのふ軍の中より斤わたり　羽笠
名もこゝろ栗と郡やよ上ヶ　野水
太年ハ念仏となふるこゑへも櫛　旦藁
かのことを無我りよきき隣あるも　越人
胡弓の名あるのとりに枸杞うゑく　荷兮

のこふ古日ときやき麦の粉　羽笠
つれつる宿もてるうふ寺れ垣や　野水
こもて魂まかるきみかれの月　旦藁
陽炎のもえのこりたる夫婦ふて　越人
去る御行ふ寄いまちく　荷兮
ウ
四とおくきるる尾ふもえかり　羽笠
力の茅とつきし中の子　野水
漣や三井の末寺の比ともふに　旦藁
高ひくのきそ鳳の山く　越人
見つきより廿九日の月さむき　荷兮
君の沈と見ゑ出ハ花ゑけ　羽笠

三月十六日旦藁か田家にとまりて

蛙のみきゝてゆゝしき寝覚かな　野水
額にあたるはるさめのもり　旦藁
蕨烹る岩木の臭き宿かりて　越人
まじりく人とをる馬の子　荷兮
たてくのる渡しの舟の月影り　冬文

芦の穂を摺る傘の端　執筆
磯きハに施餓鬼の僧の集りて　旦藁
岩のあいより藤見ゆる里　野水
春の日を雛ゆかしくも娘くれ川　荷兮
むかふるときの旅の一はり　越人
彳よる娘をハ琵琶ひいて　野水
解てやおかん枝むすふ松　冬文
今宵は更たりとてもせめて恋

同十九日荷兮室にて

咲くまの菊にはさはさき白露そ　越人
秋の和名をつくる順　芭蕉
初丁の声ふとりから犬を斧ぬ　冬文
別の月うなくくとおもうたを　荷兮
紅そ花四の名より八重桜そて　旦藁
まもしろくの笠をおもいうし　野水
永きりや白綱と此月ふあるらん　荷兮
美の字華やかなるみ月るの中　越人
結蕗か瓢ハありく茶ハなく　野水

連歌のゆかりにあるるいそうし　冬
世を捨てり紫押まけて音をとめん　越
岩苔とりの浮かりきもしきと　旦
むかしはりふ帛なるはかり世帯ふ　冬
莚二枚をかふさふわるの亀　越
朝舟の露あまれさふ麦作る　旦
甚うちを送るきぬくの月　野
風の形さ秋の日舟ふ細入りて　荷
さる雨の湊のとまりめかりて　冬
あらましのさくねは花ふりまぬ　野
物うく一期舞ハ捨あかし　荷
家まのさまわ浮かり風紀さく　越
遅桜今ハいふ花の代　旦
山ハ花所のもちて枕ふ日かり　冬
くりかへして次第常作なかり　荷

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあるれきさ個のちられかて　越

蝶水のみて居るおもふたし岩そし　舟泉
きさらぎや雁鴨まださはかしく　聴雪
川傘のちらちら洗ふたち岩　蠡髭
翔りど鶯も川沿ひのつれしく　荷兮
あれさ花門をやくお堂　執筆

春

昌陸の松とハつきぬ御代の春　利重
元日の木の間の競馬足ゆるし　重五
初春の遠里牛のなき日かな　昌圭
けさの春海ハほどあり麦の原　雨桐
門は松芍薬園の雪さむし　舟泉
鯉の音水ほの暗く梅白し　羽笠
舟／＼の小松に雪の残りけり　旦藁
曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜国
揺でゝも元日里の曙のれ　犀々
星をくゝられまぬ花の空のさま　呑霞
ふきても小松ありつらん年の菱　聴雪

朝日二分柳の動くおもひ有　荷兮
先明て野の末ひくき霞かな　仝
芹摘とてこけて酒なき雛かな　旦藁
のがれたる人の許へ行とて
ゑぐさハ白路の寒し冬の遠み　越人
古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉
傘ハ法の晴り胡蝶のやすらふ　重五
山吹や花墻根くの酒もやし　亀洞
花ふかう見れて家あり楽し人に　越人

春野吟

足跡を桜を曲る庵二つ　杜國
ふかき寺うかれぬおめハさくらかな　李尺
榎木まで桜の遅きながめかな　荷兮

餞別

藪の花さくら川あゆく別かな　越人
山畑の茶つみぞかざす夕日かな　重五
蛙ひとつ川に捨られぬ桜さきの雪　仝

夏

ほとゝぎすその山鳥の尾ハながし　九白

新麦やさゝゆきに蛇ぐゝめる根ぶり　李風

かつこ鳥板屋の背戸の一里塚　越人

うれしさハ葉がくれ梅の一ツかな　杜國

若竹のうらふみたるゝ雀の巣　亀洞

傘をとらまで帰る秋のゝかな　舟泉

武蔵坊をとぶらふ

まくのけや立て手くびの衣川　商露

道頓の杉に笑ふも田るわらべ小町く

馬のくつかれてくりくりたの月　聴雪

老聃曰知足之足常足

夕がほに雑炊あつき藁屋かな　越人

幕末の撫子こゝろしく咲かな　柳雨

はゝきゞハあらむも井中のむかひ　塁文

螢窓ハ隣に見えさき花のもと　荷兮

蓮池のふかさ見るほど深かな　仝

唯の夏涼しき茶屋の過ぎさかな　昌圭

鳥川の青き宿のるおもひかな　重五

譬喩品ノ三界無安猶如火宅

といふ心を

六月の汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

背戸の畑なすび黄ばみてきりぎりす　且藁

貧家の玉祭

玉祭むかふゆふべの家かな　越人

なきがらを笠に隠すや秋の風　前桐

ちぎれくも人をとがむる月見かな　芭蕉

山寺に米つくほどの月夜かな　越人

あさがほに面白やは秋の月　野水

八島をかけたる屏風の繪をみて

具足きて顔のみ多し月見舟　仝

待恋

しのぶ夜を小夜ふけゆけバ人のきぬ　荷兮

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　仝

桐の葉ハまだつゝむ事ゆかしけり　舟泉

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ　杜國

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申し　大垣住 如行

雪のちる葦の[?]葉蔦かれ　昌碧

[?]あつむる雪の行[?]　芭蕉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

このころの氷ふみわる名残かな　杜國

隠士にかりたる宅をまかりけて

[?]菜畠[?]川[?]　荷兮

貞享三丙寅年仲秋下浣

冬の日

笠は長途の雨にほころび帋衣はとまりとまりのあらしにもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえけるむかし狂哥の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉

たそやとばしる笠の山茶花　野水

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

かしらの露をふるふあかむま　重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜國

日のちりちりに野に米を刈　正平

我庵は鷺に宿かすあたりにて　野水

髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉

いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五

きえぬそとばにすごすごとなく　荷兮

影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉

あるじはひんにたえし虚家（カライヘ）　杜國
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんばか　野水
たそがれを横にながむる月ほそし　杜國
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五
今ぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜國
烏賊はえびすの国のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五

巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜國
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜國
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年
いまだころもを振はず　埜水

はつ雪のことしも袴きてかへる
霜にまだ見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜國
奥のきさらぎを只なきになく　埜水

廊ふるく縁をもいとふなる男　荷兮
孫さましけの泥にはさし　芭蕉
口をしと瘤をちぎる力なき　野水
明りハくるまふくらび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月ハ遅くの出牡丹めでる人　杜國
縄あみのかゞりハやぶれ壁落て　重五
こつ〳〵とのミ地蔵切町　荷兮
や嫁入の
初花の世とや嫁のいかめしく　杜國
かぶろいくらの春ぞかはれる　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなり　荷兮
うぐひす起よ紙燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめ〳〵のさても七十　杜國
奉加めす御堂に金うちはりて　重五
ひとつの傘の下挙りさし　荷兮

蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜國
窓にしりつゝ薄様をすき　野水
月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮
恋せぬきぬた醒睡とまし川　芭蕉
秋蟬の虚に声きくしづかさハ　野水
藤の実ハたゞに雫のちるまゝ　重五
徒より硯をひらき山のけふ　芭蕉
ひとりハ典侍の局の内侍の　杜國
三ケの花鸚鵡尾なくの香軍　重五
しら〳〵神のさくむ越の梅原川　荷兮

杖をひく事僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　杜國
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五
まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふる花見次郎と仰がれて　重五
五形(ゲンゲ)菫の畠六反　杜國
うれしげに囀る雲雀ちり／＼と　野水
眞昼の馬のねぶたがほ也　芭蕉
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜國
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮
捨し子は柴苅長にのびつらん　野水
晦日をさむく刀賣る年　重五

雪の狂呉の國の笠めづらしや　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　芭蕉
あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名殘おしまる　杜國
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事をゆるしてはぜを放ちける　杜國
聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帯引　重五
こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮
その望の日を我もおなじく　芭蕉

なかまは深くあし火焼家をて
さゝ宿られと

炭賣のおのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨く寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜國

鶴みるまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
か茂川や胡磨千代まつり微ちかし　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜國
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火おかぬ火燵なき人をみん　芭蕉
門もるの翁に帋子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜國
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず欵冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鑄る　重五
八十年を三つみる童母もちて　野水

なかだちそむる七夕のつま　杜國
西南に桂の花のつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉
賤の家に賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜國
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地(ツチ)　羽笠
いのちとて誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　野水
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなくなく簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜國

田家眺望

霜月や鸛の彳々(ツクツク)ならびゐて　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜國
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌とる童蘭切にいでて　埜水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜國
茶に絲遊をそむる風の香　重五
雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曽作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉
江を近く獨樂庵と世を捨て　重五
我月出よ身はおぼろなる　杜國
たび衣笛に落花を打拂　羽笠
籠輿ゆるす木瓜の山あひ　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉

乞食の蓑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國
御幸に進む水のみくすり　重五
ことにてる年の小角豆の花もろし　野水
萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の實　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪はきをよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

追加

てのふくよかに雞面くしとらつ雲ゐ　羽笠

椿あふあふるこのれにそうの雲　荷兮

さくら前は花に發とちみえて　重五

椿咲ぬをとや川を朝ぼ　杜國

限りなき鯰のゆくゑ月と海　芭蕉

ひくらふ楊ときくの波阜山　埜水

ひさご

江南の珍碩我にひさごを送れりこれは是水漿をもり酒をたしなむ器にもあらず或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべにもあらず吾また後の恵子にして用ることをしらずつらつら其ほとりに睡りてあやまりて其うちに論る醉をくらふ日月陽秋きらくとふして雲のあけくれの闇の郭をとこのけるとわくなくに宕細人とも見えきさあつて皆風雅の藻思をいひてまで莞いられ乃中に行かしろく乾坤のかなる事を出く持ちのこゝを云く毎日此酒に笑を了文

元禄三六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁
西日のどかによき天気なり　珎碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘　翁
月待て仮の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣がはやわざ　水
鞍置る三歳駒に秋の来て　翁
名はさまざまに降替る雨　碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　翁
いふ事を唯一方へ落しけり　碩
ほそき筋より恋つのりつゝ　水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁
月見る顔の袖おもき露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁ゆくかたや白子若松　翁
千部読花の盛の一身田　碩

順禮死ぬる道のかげろふ　水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文書ほどの力さへなき　碩
羅に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野みたきと泣給ひけり　翁
手束弓紀の関守が頑に　碩
酒ではげたるあたま成らん　水
双六の目を覗くまで暮かゝり　翁
仮の持佛にむかふ念佛　碩
中々に土間に居れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりもの也　翁
憎れていらぬ躍の肝を煎　碩
月夜月夜に明渡る月　水
花薄あまりまねけばうら枯て　翁
唯四方なる草庵の露　碩
一貫の銭むつかしと返しけり　水
医者のくすりは飲ぬ分別　翁
花咲けば芳野あたりを欠廻　水

乾ァ得さうく素の山中　頑

翁士　珎碩士　曲水士

珎碩　翁　路

いろ〳〵の名もむつかしや春の草
うたれて蛙の目はなさめぬか
蝙蝠の住ならふつらにきしきて
垣穂のひかりぬ赤蕀しより
笠縫の家をとりまく村の梅
頭巾をかふりて月まつ夜
秋の色宮司のせわしなり
ことくれいい苧ふおかけのけ
うつりかの羽織と寄るたのむまきて
山寺のはし市のたつる江
鍛冶のちかくさくらる川の端
念仏申しくとうむこつのき
うらくへし芋もつ遅き年の暮
居所の里は太りおとされ

通　仝　碩　仝　通　仝　碩　仝　通　仝　碩　仝

眠るをとまれき人の娵つまる
花はあらいよ月を織夜
さかのさし塚の下を祖白より
生網ある浦の素の舟
此村の廣さに鷺来のあつりかね
そろそんおけたもの長くといふ
くもらさる世を遁居しをたゆるき
まさ過此は酒のささえきたえ
なりゆる秋の夕そくとひろき
蕎麦さし向ひの山の桐中
うとんのつけのそふ是の月の秋
きかると川わのさされ裸むし
琉しやすり菓こと云とすまて
文珠の智恵に蘂特の愚痴
なかれ加減又といはれすひに露
酒中せめに落る酒棚
志のふ秋のとうきあつて若出来
舞ふより別とええぬ別しく

荷　越

通　仝　碩　仝　兮　人　兮　人　兮　人　兮　人　兮　人　兮　仝

汗の香をかくくゝ衣をとりはなし　人

ちゝまりまるとらちあけてふる　仝

花さかり又百人の揃えり　仝

まつ八続きとかゝめんさる　挌

珍碩九　翁一　路通八　荷兮十

越人八

城　　下　　野経

鉄炮のたまちまる秋月に　里東

砂の小麦の痩てちらく　泥土

あるかぜにすまけの小貝捨させて　乙州

なりまぬる一川湖ひろくつり　怒誰

基いさらひ二人ちゝるる背殿に　珍碩

秋の秋鳥の物まつりのこゑ　筆

めかと花ん細家に物をられて　野経

目の中おかく見るりちふる　里東

としふ又川原ゆしとよくわふえ　泥土

新のとくしさ生れつきなり　乙州

馬に合朝は髪をなしやもく　怒誰

一里こそらぬ山の下荊　泥土

見知る込て蚊屋に足を出られも　里東

おそれ世そなきて蚊くしられと　野経

見ゆ所に宗越の粧めのをさきらに　乙州

まち出ふつれく丁百の珠　珎碩

自然ふ庭屋をよくくるあきせ　怒誰

鶯者めの泡のこつぎ不厳　里東

くゐ者に付ては起てきぬれず　珎碩

米気遠の坊を泣出を　乙州

のみやり居所の蓋の一さわき　野経

ちそきそらちの祭る猿倉　怒誰

咲ゝ八百鉢ますて鳥帽子にて　泥土

駒所をてよふ供御の蛤　珎碩

ふそて見八木幽灵の泣やらん　里東

連もかをふれ座敷なり　野経

かくの風の大罡寺縄手吹遶し　乙州

貴めこそるに用叶へしくさ

糊剛き夜著にちひさき虫有て　泥土
ゆふくの月に菜食噀出る　怒誰
看経の蚊にゆるき唯気ある　里東
四十八卷のうつしうき　珎碩
髪くせに枕の流を森思ふく　乙州
酔と細月りあなく咲るゝ　野経
杉村の花は若菜に首まつさ　怒誰
因の斤隣り苗のとりさし　泥土

野経六　里東六　泥土六　乙州六
怒誰六　珎碩五　筆一

雑

亀の甲烹らるゝ時は鳴もせで　乙州
唯牛の蠹に風のふく音　珎碩
百姓の木綿仕舞は冬のきて　里東
小舟そろふる川ばらの縄　探志
稲葉く奥の間ひろき旅の月　昌房
蟷螂露くきする打焼　正秀

秋萩の御前にちる坊が花　及肩
風呂の加減の声うあかりから　野経
宵の宿ぎよわて嘆いくし　二嘯
売の火かゝるかまもとの雲　乙州
あけ花に餅の栄得たなる　珎碩
人のそしりに意をあづける　里東
山蔵の番に吹て三夜の位　探志
庸きうり訛く常に鳴　昌房
境への中庭さけて月に仍　正秀
ゆくえ京も人のる中のさむ　及肩
若に蟹をる物の町屋の今年米　野経
雀と荒ぶ籬のちら見き　二嘯
うすかる日いろんうと露にれて　乙州
体いんなら人あそのむちぬる　珎碩
徒て又き木綿絵の形をもき色　里東
探みあまされてきさあけ外の　探志
時のり小茱萸のトとおの付　昌房
猪馬と鳴る気まゝり口　正秀

いそかしき旅一もちに捷君　及肩
あくるこのくる鐘撞の秋　野經
浮雲くれと切紙の紙手[デ]で風吹て　二嘯
寺かの庵ふも傍のうかめ月　乙州
唯物ふ味のつくこそ喰し乃迄　珎碩
蝶様うちは次了居替る　里東
同じ多くす毛のうらとぞう捨て　探志
こひみたうくさ宮上侍　昌房
手をしらふ手拭袖もちて揺ふさけ　正秀
縄と集る寺乃上藪　及肩
花の浪立の日待ふ花ご見て　野經
さくらふ根ふ柳子の春風　二嘯

乙州四　珎碩仝　里東仝　探志仝
昌房仝　正秀仝　及肩仝　野經仝
二嘯仝

田野

曙遁や前代时の角大師　正秀
明星え沙汰も野嵐の新　珎碩
前ふこのわやくふ明しまの室　仝
かまくまでのしき門口の文字　秀
目新く利休の家と奥ふ是　仝
夜じ芋と世をさらてあり　碩
来いはつ跳くくと明ゆるむ　秀
丘ふくくの本筏こ川める　碩
誓文と百もふてゐる別様ふ　秀
なくらくくらり侘の侍　碩
須广はまさ物名自然ある来不　秀
梳のおるうかりりやる　碩
見ゆる師走の空結浪河　秀
安行ふ居くゐる猫も進まれ　碩
いくめて大根さしもみくれて　秀
猫ある子も綉[チヤ]絡[ホ]み替る　碩
江戸あくと前後夜ふ出つけり　秀
あひの山弾きの入逢　仝
香崖明里は厩[ニヤ]糞[コエ]ぞさ落し　碩

たとゆるく居る禅門の祖父　秀
本堂ハまだ荒壁のあらし絶　碩
羅綾の袂志かへて結ハぬ　秀
蚤を痛人のなめを結ふなく　碩
荷を重てくるしむあまくさく癒くり　秀
前経の窓に紙帳を掛かへさ　碩
口上果ぬいふさまの時宜　秀
あやまりふ小判うそふる草袴　碩
秋の霧る　肥後の熊本　秀
寝り給ふ宿て月見る紀若紅　碩
あふ本子ひとつ川おさとえり　秀
沢山り元めくと叱られて　碩
哞ありけらし猫ハ帰らるも　秀
子規内小人町の暮あらり　碩
中にわの楓木の芽ゆえ之　秀
ちゝ花ふ雲路行よる声ありく　碩
小野の雨増ふもゆかけるふ　秀

正秀十九　珎碩十七

猿みの

晋其角序

誹諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起べき時なれや幻術の第一としてその句に魂の入されハゆめにゆめみるに似たるべし久しく世にとゞまり長く人にうつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及ばず心をこらすべきたしなみなり彼西行上人の骨にて人を作りたてゝ声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける人にハ成て侍れども五の声のわかれざるは反魂の法のおろそかに侍にや去ハたましひの入たらばアイウエオよくひゞきていかならん吟声も出ぬべし只誹諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ伊賀越しける山中にて

猿に小蓑を着せて誹諧の神を入
たまひけれバたちまち断腸のおも
ひを叫びけむあだに懼るべき幻術
なりこれを元として此集をつくり
て猿みのとは名付申されける是
が序もその心をとりて魂を合せて
去来凡兆のほしげなるにまかせて
書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声　其角

時雨きや並びかねたる魦舟　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧 丈草

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳所 正秀

広沢やひとり時雨るゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曽良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津 乙州

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　膳所 昌房

いそがしや沖の時雨の真帆片帆　去来

はつしもに行や北斗の星の前　伊賀 百歳

一いろも動く物なき霜夜かな　野水

[illegible]

さゝ竹しの中行をかよふて舟の中　其角

隠家や花を行水のしん遊切し　仝

禅寺の松の落葉や神無月　凡兆

百舌ありみる家の中の桃と午月　嵐蘭

らうし也故脛痛む人の歎　芭蕉

砂よりや塩のうらへのあかまき　凡兆

奈良にて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな　伊賀 土芳

渋柿となりめく通る干柿哉　膳所 裾道

茶の花やほりてく人のふるき墓を女　越人

この寺の茶の花咲に折れける　伊賀 猿雖

六るの男子もきくしみるまへ　凡兆

翁の庵の小窓にすゝき初めく

雑

欲のふところあたゝかくなりにけり　其角

この寒き牡丹の花のゆかの裸　伊賀 車来

草澤

蛍とも見たりうするみのとふる　尚白

鶉追ふ人しるちかくのたるの跡　琳碩

霜月朔旦

鞴まつりあかのたつし赤柏　伊賀 良品

あら舟の帆を据うやみな仙花　羽州坂田 不玉

冬の世をのむりきるや京の縁　尾張 旦藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去来

一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸

さゝいぬるふとんかゝへの冬のさむさ　尚白

茶湯とてつめたき日にも稽古哉　江戸 亀翁

炭竈に手負の猪の倒れけり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置巨燵　芭蕉

病人や巨燵屛風のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

未をかわるかたに切るゝ冬の色　尾張 芥境

こゝろつくしに旅する冬をとざされけり　伊賀 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈草

凩や巴とくみてむしかへる　曽良

ゆしるのそばや干しを刈るかな　去来

狼のあと踏消すや浜ちどり　史邦

禅門の革足袋おろす十夜かな　丈草

いり口さる雪ふまれてやまぬる　千那

ゑ田の鴨や浦のふらるにかゞ瀬　凡兆

禿古のえくのつる跡や鷺の巾　木節

みなそこを見て来た皃の小鴨かな　文草

鳥どもも寝入て居るか余吾の海　路通

ゐまて様あらしん霽の紙　旦藁

襟巻に首引入て冬の月　杉風

この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

から尻の蒲団ばかりや冬の旅　長崎　暮年

ひやうそくて様人宿し石部山　大津尼　智月

翁行脚のふるき衾をあたへらる

就あり晦し

首出して初雪見ばや此衾　竹戸

題竹戸之衾

畳めハ我手のあとぞ紙衾　曽良

魚のかけ鷺の中なせさむさかな　探丸

木枕のあかや伊吹にのこる雪　文草

洛白河に候て

藤つきふうしまりねる霰かな　史邦

榎桐の葉の霜の上に杭にかゝりしぐれ　野童

鶴の様なうつるをそ霜くの秋　伊賀　蜂禾

呼かへす鮒売見えぬあられかな　凡兆

こゝろれ淀やかた殿の出替るを　膳所　畫好

初雪や内に居さうな人は誰　其角

木川もきふ座主の後のごとく湖　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅

わきまへと爪に霰沫氷雪まろげ　探丸

しも京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

なかなかと川一筋や雪の原　仝

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の芒の刈残し　芭蕉

草庵の留守をとひて

[illegible]あけても庵の雪　其角

雪の日ハ竹の子笠ぞまさりける　尾張　羽笠

雑水に琵琶きく軒の霰哉　長崎 卯七

ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去来

青亜追悼

乳のみ子に世を渡したる師走哉　尚白

から鮭も空也の痩も寒の内　芭蕉

鉢たゝきあはれは顔に似ぬものか　乙州

一月は我に米かせはちたゝき　丈草

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

節季候に又のぞかるゝ[illegible]　加賀 順琢

[illegible]　仝 祐甫

乙州が新宅にて

人に家を買せて我は年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

[illegible]　長和

[illegible]　去来

[illegible]　仝

[illegible]　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

としの暮破れ袴の幾くだり　杉風

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏がすみ曇り行方や時鳥　木節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

[illegible]何もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野の門構　凡兆

[illegible]郭公　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす滝よりかみのわたりかな　丈草

[illegible]やほとゝぎす　去来

こひ死ば我塚でなけ時鳥　遊女 奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや

鶴の毛衣とよめりければ

○猿みの

松嶋や鶴に身をかれほとゝきす　曽良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庭せまく庭草を見ず

かの松や家の中にも一ながめ　膳所 曲水

四月廿日詣慈母墓

花のみをうつしてくる衣かな　其角

ちらされぬ花と牡丹の姿かな　江戸 全峯

別僧

ちるときの心安さよけしの花　越人

結ぶ身のある人にわかれをしけの色　珎碩

翁に俤られてわかれつゝゆりしに

似合しきけしの一重や須磨の里　七人 杜國

まぎれぬを盆の中のけしの花　嵐蘭

井手にて山吹に情し　杜若　半残

起されてまきれぬ朝の間の

起しのこゝろそれのさつきさ　仙化

題去来之嵯峨落柿舎二句

豆植る畑も木部屋も名所かな　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曽良

南部旅店

雉のこゑくりうの部の国の桐　千那

洗濯やきぬにもみ込柿の花　尾張 薄芝

豊國にて

竹の子の力を誰にくらべまし　凡兆

竹の子や畠隣に悪太郎　去来

たけのこや稚き時の絵のすさみ　芭蕉

猿に喰つゝきことりし此の卵　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

黒ら付や荒麻の中に猫一ツ　越人

入江の鳥こゝろのしかりあつて

節句にも並てふける菖蒲かな　其角

粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉

淡篠の屋をうけりし粽　江戸 岩翁

さながらに宮人やかへる那　尚白

五月六日大坂うち死の遠忌を
弔ひて
大坂や見ぬよの夏の五十年　伊賀 蟬吟
これは聞えし高館なり
夏艸や兵共がゆめの跡　芭蕉
這出よかひやが下のひきの声　仝
此境はひわたるほどといへるも
こゝの事にや
かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　仝
五月雨に家ふり捨てなめくじり　凡兆
ひね麦の味なき空や五月雨　木節
馬士の謂次第はれぬさつき雨　史邦
奥州名取の郡に入て中将実方
の塚はいづこにやと尋侍れば道より
一里半ばかり左りの方笠嶋といふ
所に有とをしふふりつゞきたる
五月雨いとわりなく打過るに
笠嶋やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

大和紀伊のさかひはてなし坂にて
往来の順礼をとゞめて奉加すゝめ
ければ料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る
つゞくりもはてなし坂や五月雨　去来
髪剃や一夜に金情て五月雨　凡兆
日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉
縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅
七十余の老醫みまかりけるに申遣す
こゝろもなくまく寺にいそとの句を
けるその老醫いまそかりし時とも
ちからにたのみける人のあつさりとしぬれば
かなしびよらで古来まれなる年に
みちたりとゆきさうか飛て
六尺も力おとしや五月雨　其角
百姓も麦に取つく茶摘哥　去来
志ゝしこや茶山しに行夫婦づれ　正秀
つかみ合子共のたけや麦畠　膳所 游刀
[illegible]

麦藁の家してやらん雨蛙　智月

麦めしに鰹を吟ふ山家かな　江戸 花紅

しら川の関こえて

風流のはじめや奥の田植うた　芭蕉

出羽の尾花沢にて

眉掃を面影にして紅粉の花　仝

内袴のうちになつかし紅粉の花　千那

田の畝の豆つたひ行螢かな　伊賀 万乎

膳所曲水之楼にて

螢火や吹とばされて鳰のやみ　去来

勢田の螢見二句

闇の夜や子供泣出す螢舟　凡兆

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢火やこはごはのぞく八鬼尾谷　田上尼

あれうちに鵜とせりあはぬ[illegible]　尚白

草むしや百合の中くゞれの臭　半残

病後

病人やかしらふらつく百合の花　大阪 何処

ちる風やうかよりちる百合の花　乙州

焼故郷を悲みて

子や泣ん其子の母も蚊の喰ん　嵐蘭

餞別

立さまや蚊屋もはづさぬ旅の宿　膳所 里東

うとく成人にわかるゝ

[illegible]けしく

みじか夜を吉次が冠者に名残かな　其角

[illegible]の所や蚤の[illegible]耳の穴　文草

下闇や地虫ながらの蝉の声　嵐雪

宮ふりの[illegible]や居かはるせみの声　膳所 探志

頓てしぬけしきは見えず蝉の声　芭蕉

[illegible]麻刈る[illegible]の[illegible]　伊賀 偎市

渡り懸て藻の花のぞく流哉　凡兆

[illegible]川の[illegible]合歓の花　千那

[illegible]日の夕　史邦

素堂之蓮池邉

白雨や蓮一枚の捨あたま　尚蘭

日焼田や時々つらく鳴蛙　乙州

ひとゝきは盥の底の蠓られ　凡兆

みな月も鼻つきあはす数寄屋哉　仝

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

たゞ暑し籬によれば髪の落　木節

まんなかの藪にて風見えてあつかりし　野童

夕がほによばれてつらき暑さかな　羽紅

こゝろよく湯文のぬくる[illegible]　江戸 巴山

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍る

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

あつき日や鈍合羽ぬぐ夕まぐれ　嵐蘭

あつくなき稲の葉は涼しき夕かな　宗次

あつしあつし門々に蒔れ盗　凡兆

唐墨も兄のもとより　千那

夕涼見の家のうち　曽良

夕ぐれや屼並びたる雲のみね　去来

ちらめて流ふかく雲のみね今のは比叡に似て移る　大阪 之道

秋

秋風や蓮をちからに花一つ　不知読人

此句東武よりきこえ侍る　素堂か

がつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風

芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通

人に似て猿も手を組秋の風　珍碩

加賀の全昌寺に宿す

終宵秋風きくやうらの山　曽良

芦の穂や淀の庵ぬ招く秋の風　江戸 山川

いさかさの家の金網の秋の風　凡兆

木の間にや粽の外の秋あり　去来

大比叡やたゞ一筋の雲の霞　野童

三葉ちりて跡はかれ木や桐の苗　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　芭蕉

七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀小年　杜若

ミやこにも住まじりけり相撲取　去来

なげられて坊主なりけり辻相撲　伊賀　風麦

蕣やぬかごの蔓のほどかれず　膳所　及肩

笑ふて住まし似さる木槿かな　嵐蘭

まとふとてとつてかへれば木槿かな　杉風

ゐる鶴の籠ぬるゝものかき槿かな　千那

えてもなく隙のある事や秋霖雨　史邦

そよくや萩の内より初あらし　且藁

秋風やとても薄はうごくはず　三川　子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八朔おのおのに松苗して菓子の
文きたる序に

まゐらせく栂の先の落られ　凡兆

つらつらうつりかはるにつけて
いかの山まで都もゆかで

見えがくれ雁もまじるゝ如くしてれ落　去来

草刈よそれが思ひか萩の露　平田　李由

元禄二年翁に供せられてみちのく
より三越路にかゝり行脚しけるに
加賀の國にていたはり侍りて
いせまで先達侍るとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

和歌に師匠なき身はかなしくれの秋　七人　落梧

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

あまのやは小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀の小松と云處多田の神社
の宝物として実盛が菊から草のかぶと
同じく錦のきれをのこせり

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

菜畑や二葉の中の虫の聲　尚白

たゝかりや椿も出みて鳴秋の月夜　風麦

いせにまゐりてたる付

宵月や先橋に渡る人もあらん　千子

こゝの月に蓋のあくまでとゝもうり　之道

粟稗と目出度なりぬ小月秋　半残

月見せん伏見の城の捨郭　去来

翁と茅舎にねられて

おもしろう松笠もえよ薄月夜　土芳

加茂に詣　ありかたさに涙のこぼるゝと　かの人のたゞよひける社の

非ほよみつきてよみしこゝや

月影や拍子わたる流の上　史邦

友達の六條にかみそりいたゞくとてまかりけるに

影ぼふしふたつさえ送る朝月夜　卓袋

さゝ浪やおらへしる月の影　乙州

京筑紫去年の月とふ僧仲間　文草

吹風の相手や空に月一つ　凡兆

倚かゝりてよ所にかゝぬ月の雨　尚白

向の能き宿も月見る契かな　曽良

元禄二年つるがの湊に月を見て気比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望猫子を送葬して

このあきは膝に子のない月見かな　去来

明月や処は寺の茶の木はら　昌房（膳所）

月見れは八人の旅にいそきたし　羽紅

僧正のいもとの小屋のきぬた哉　尚白

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやふるゝこまむかへ　去来

稗の穂の馬逃したるけしき哉　越人

澁糟やからすも喰はず荒畠　正秀

いのまゝりてきゝゝおさくる鏞かな　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしき拍子も見えず里神楽　曽良

たそかれや磯に小舟て鳴秋い月夜　風麦

いせにまうでゝかゝる時

葉月や矢橋に渡る人とめん　七人 千子

三日月に鶫のあくまをどらしける　之道

粟稗と目出度なりぬはつ月秋　半残

月見せん伏見の城の捨郭　去来

翁と茅舎に宿して

押のしろう桜ゐにえたる月秋　伊賀 土芳

加茂に詣

ある人渡りのつるぎこ
かのもんのためねこもの

称侍にこつきてよみしらや

月影や拍子をかゝる猿の上　史邦

友達の六條にかみそりいたゞくとて

新発意といふ名ぞ送る胡月秋　伊賀 卓袋

たゞ銭になるやおろしゝ月の影　乙州

京筑紫去年の月とふ僧仲間　文草

吹風の相手や空に月一ツ　凡兆

僧こゝろよそにしられぬ月の前　尚白

向の能き宿も月見る契かな　曽良

元禄二年つるがの湊に月を見て気比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬して

このうき秋の月に見ながら送りけり　去来

明月や處は寺の茶の木はら　膳所 昌房

月見ても八人の旅にいそがれし　羽紅

僧正のいもとの小屋のきぬた哉　尚白

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやぶるゝこまむかへ　去来

稗の穂の馬逃したるけしき哉　越人

渋糟やからすも喰ず荒畠　正秀

いのありてきらうおとろへ鏽小刀　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしき拍子も見えず里神楽　曽良

旅枕鹿のつき合軒の下　江戸　千里

鳩吹や渋柿原の蕎麦畑　珎碩

上行と下くる雲や秋の天　凡兆

鞴つる比と宵くらし鐘つかす　半残

田舎間のうすへりせまし菊の宿　尚白

蕎麦に切る嫁まつしらぬふかかり　其角

高土手に小鶸の啼日や雲ちぎれ　珎碩

こかれのおわりいろは稲の秋　土芳

稲かつく母に出むかふうれしさよ　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去来

まつ塚やおもしらく柿の下紅葉　虚生

明寺し朱切山のうすもみぢ　凡兆

神田祭

されいとてゐ家の柏子のおもしろや

神田祭の鼓うつ音　蚊足

拍子そくあつまりけりとや

花をはたなる花とまつりかな　嵐雪

月秋のあいた日稲るおもしろきに　文草

ゑあむる秋の夕や風わたる　凡兆

世の中は鶺鴒の尾のひまもなし　仝

墳奥の墓にさきうつや秋の萤　荷兮

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上臈の山荘にましましけるに

候ふてまかりて

梅が香や山路猟入ル犬のまね　去来

梅か香や分入里ハ牛の角　加賀　句空

庭興

梅が香や砂利しき流す谷の奥　土芳

ふ川堤や崖まで分けし梅の花　半残

梅が香や酒のかよひのあたらしき　膳所　蟬吼

くゑのみや比つ家と聴のこふ　其角

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もとゆかし梅の花　芭蕉

痩寺や作りくされの畠の梅　千那

灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆

日當りの梅咲ころや屑牛房　攝津 支幽

暗香浮動月黄昏

入あひの梅になり込ひゞきかな　風麦

武江におもむく旅亭の残夜

寐ころびしき宿の朧月や闇の梅　乙州

辛未のとし法もの春はしめつかたより

けふ山水見えて梅の盛はさかりなれ

旧友嵐雪にあひて

あれ見えつゝ留とは思ふにさこそ

此心にもひとしれて感ぬ

我等やかはり深きにとはしられ

その枝の梅にちりもまたゝて咲る

これをこそ亡人いまも風雅を忘れざるや

梅さけや又一目見ん宵の梅　嵐蘭

百八のかねて迷ふや闇の梅　其角

ひとりゆく能宿をしん和子日　去来

野畠や雁追のけて摘若菜　史邦

芹川や雪に隣る若菜摘　嵐蘭

雪の日や旅にかゝるあのきゝつゝ　如行

憶翁之客中

旅ねして若菜をつまん草枕　嵐雪

つみ捨て蹈付がたき若菜かな　路通

七種や跡にうかるゝ朝がらす　其角

あらうたと鶯のふけし相舟に　文草

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

鶯は松のところに月を知　仝

拂くさきこぬ梢もあれば鶯も　去来

鶯の音にたびら雪降る　伊賀 一桐

うぐひすや下駄の歯につく小田の土　江戸 濁石

鶯や遠路にかゝる乳のくし　其角

うぐひすや竹の隠に當の土　凡兆

鶯や家とはそこにかくる　伊賀 奥日

ゆつの来て梢にうつりはるさ　採九

此頃はさかり静かに柳かな　江戸 卜宅

堀こしふゑ〳〵てきるふん柳哉　江戸 座水
よこた川植まわらぬ柳哉　尚白
ちる桜のおくれや鉈の往ごゝろ　伊賀 一咲
ゐやけや蛤いふき場のちりみ　同 木白
侍中の正月もやゝ三ケ月　揚水

田家にありて

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉
うらやまし思ひ切時猫の恋　越人
うき友にかまれてねこの空ながめ　去来

露沾公にて餘寒の当座

春風にぬぎもさだめぬ羽織哉　亀翁
此梅のちりしかまさき二月哉　尚白
出かはりや櫃にあまれるきぬのくけ　亀翁
出替や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪
背紫のかゝる衣から本芽哉　凡兆
白魚や海苔は下部のかい合せ　其角
人の手にとられて後や桜海苔　尾張 杉峯
春雨に降出したきつくつくし　元志

陽炎や取つきかぬる雪の上　荷兮
かげろふや土もこなさぬあらおこし　百歳
かげろふやほろほろ落る岸の砂　土芳
いとゆふのいとあそぶ也虚木立　伊賀 氷固
野ゝふるゑあれあれさえた流哉　凡兆
かげろふや柴胡の糸の薄曇　芭蕉
いとゆふに自身のきせ作り稲活　同 配力
椅脊のちりふえらるゝわらんべ　嵐雪
彼岸まへさむさも一つ二度哉　路通
此ごろや花のまゝりて涅槃像　野水
藪垣へ突く燕のかよひ道　凡兆
ころころと木や泥のしかせの屑　同 沢雉
春雨や欄の少ふ花吹込　嵐虎

京の山にありて

春雨や山より出る雲の門　猿雖
不性さやかき起されし春の雨　芭蕉
春雨や田蓑の島の鯲売　史邦
ちるはなのおとくや水のそゞき堂　羽紅

泥亀や苗代水の畦つたひ　史邦

嗅しまつる春箒の竹や出の糞　昌房

振舞や下座になをる去年の雛　去来

ちる風ふころもされ雛の袖の花　伊賀 荻子

桃柳くばりありくやをんなの子　羽紅

かくの菜摘はまゝあらぬ垣根から　三河 鳥巣

里人の渉り落しくる田螺の札　凡推

蝶の来て一夜寝にけり葱のきぼ　半残

紙鳶きれて白根か嶽を行方かな　加賀山中 桃妖

つのくりこゝろよゝきもや濘　伊賀 園風

日の影やごもくの上の親すゞめ　珍碩

荒鍬ふむとその土くれや添の土　土芳

麦の穂や泪に染て鳴雲雀　芭蕉

越より飛騨へ行とて籠のわたりのあやうきところ〴〵道もなき山路にさまよひて

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆

うきてうよりかへるもとのしらぬ　伊賀 石口

子なし傍へや出行の己があゆみ　杉風

ひばりなく中の拍子や雉子の声　芭蕉

芭蕉庵のふるきを訪

菫草小鍋洗ひし跡やこれ　曲水

木瓜筋揺してゑんく〳〵蝶の夢　江戸 山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

向ふの家ふきさらゝく桜の花　車来

もろ〳〵かのしく山路にかゝりて

鰯のくに人皆しいそぐ

并てうそむりやちる椊　羽紅

堀外寺にかせる椿の花　津国山本 坂上氏

鶯の笠おとしたる椿かな　芭蕉

春雨は追てふきけむて　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一枝はをらぬもわろし山ざくら　尚白

鶯のあらしきこゆるやま梅　凡兆

あちこちし枝あらしちる桜　丈草

有明のはつくに咲て遅ざくら　史邦

花咲ちられてゆくハ花の雲　千那

葛城のふもとを過る

猶みたし花に明行神の顔　芭蕉

いがの国花垣の庄ハそのかみ南都の
八重桜の料に附られけるといひ伝へ
侍れば

一里ハみな花守の子孫かや　仝

亡父の墓東武谷中に有しを
あれ廿年の後かの地にくだりて墓の
おもに桜植置侍りしがめし杉の梢
きりくづしてその桜も残ず焼たるに此の
墓桜咲られ侍りて

まうけしや花咲に塚の様変り　園風

知人にあはじくと花見かな　去来

ゆく春の姥(?)がし花の都かな　凡兆

浪人のやどもなく
荒もあれてあれて花　半残

暁よりも花中のゆふへ哉　長眉

花も奥あるやよしのに深く分入て

大峯やよしのゝ奥の花の果　曽良

道灌山にのぼる

道灌や花ハその代を嵐哉　嵐蘭

源氏の絵を見て

桜干におちかゝる花のころもさ　羽紅

庚午の歳家を焼て

焼にけりされども花はちりすまし　加賀 北枝

をれちるや御前の樋おとしけり　凡兆

海棠の花ハ満てるよるの月　江戸 普船

大和行脚のとき

草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉

山吹や躑躅よけ行庵の内　探丸

やまざくら海をはなれて夕日影　智月

花見にもたつかぬ花のかなしさよ　山川

曙の花はさかりて山の裾　伊賀 式之

木曽塚

行春の花ともなくて次第のる　乙州
春の夜はたれか初瀬の堂籠　曽良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

鳶の羽も刷（カイツクロヒ）ぬはつしぐれ　去来
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるる川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かかる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨　去来
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　史邦
はきごころよきめりやすの足袋　凡兆
何事も無言の内はしづかなり　去来
里見え初て午の貝ふく　芭蕉
ほつれたる去年のねござのしたたるく　凡兆
芙蓉のはなのはらはらとちる　史邦

吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉
三里あまりの道かかえける　來
この春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直し今朝の腹立　来
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき島の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　来
ほととぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくぐらせん　蕉
いまや別の刀さし出す　來
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　来
湖水の秋の比良のはつ霜　蕉

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たたらの雲のまだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去来九　芭蕉九　凡兆九　史邦九

市中は物のにほひや夏の月　凡兆　兆
あつしあつしと門々の声　芭蕉　蕉
二番草取りも果さず穂に出て　去来　来
灰うちたたくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
ただとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しはぶるまでの老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　來
立かかり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　來
僧ややさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
五六本生木つけたる潴　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてて早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子もむしろがこひの売屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　來
こそこそと草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのままにころび落たる升落　来
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆

草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
命うれしき撰集のさた　來
さまざまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
何故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　来
御留守となれば広き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ昼のねむたさ　来

凡兆十二　芭蕉十二　去来十二

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶が高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますご喰へば風薫　兆
蛭の口処をかきて気味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　來
金鍔と人に呼るゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　來
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曾の酢茎に春もくれつゝ　兆
かへるやら山陰伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　來
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　來
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆

うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　來
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろは能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　來
雨のやどりの無常迅速　水
昼ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよぐらん　兆
糸桜腹いつぱいに咲にけり　來
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九　去來九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙刕
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　刕
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　刕
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　刕
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　刕
鑓の柄に立すがりたる花の暮　去來
灰まきちらすからしなの跡　兆
春の日に仕舞てかへる経机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　來
汗のごひ端のしるしの紺の糸　半残
わかれせはしき雞の下　土芳
大胆におもひくづれぬ恋をして

身ハ忘れ紙の取所なき
小刀の蛤刃なる細工もなく
棚つり火ともして大年の夜
ぞうりとハおのゝ深川江戸の浦
もては大家せ舟かゝるかきさぬ
此尊きをもつれめとくる破扇
物の憂ねさせらし老ゆく身を
嘆ぢ深うの備ちちらさ給つゝて
深くいふるにほとゝくめん夜哉
形れき海をもかひくる今体皇
らきもたもる作の剣乃結
花がまうくおくしのつまで定ら夜
雖の徒を深るもるゝのせ

芭蕉三　乙州五　土芳三　珍碩三
園風三　素男三　猿雖二　智月一
嵐蘭一　凡兆二　史邦一　去来二
野水一　正秀一　羽紅一　半残四

園　猿　嵐　史　野　羽
芳　残　雖　凡　残　雖　凡　芳　凡　蘭　邦　水　紅

幻住庵記

芭蕉艸

石山の奥岩間のうしろに山有國分山と云そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし麓に細き流を渡りて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ神躰は弥陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる事を両部光を和らげ利益の塵を同じうしたまふも又貴し日比は人の詣ざりければいとゞ神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸有よもぎ根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり幻住庵と云あるじの僧何がしは勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを今は八年計むかしに成て正に幻住老人の名をのみ残せり予又市中をさる事十年計にして五十年やゝちかき身は蓑虫のみのを失ひ蝸牛の家を離て奥羽象潟の暑き日に面をこがし高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて今歳湖水の波に漂鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一本の陰

のもしく軒端茨あらためかきね結添なとして
卯月の初いとかりそめに入し山のやかて出しと
さへおもひそみぬさすかに春の名残も遠からす
つゝし咲残り山藤松に懸て時鳥しはしは過る程
宿かし鳥の便さへ有を木啄のつゝくともいとはし
なとそゝろに興して魂呉楚東南に
はしり身は瀟湘洞庭に立山は未申にそ
はたち人家よきほとに隔り南薫峯より
おろし北風海を浸して涼し日枝の山比良
の高根より辛崎の松は霞こめて城有橋
有釣たるゝ舟有笠取にかよふ木樵の
聲麓の小田に早苗とる哥蛍飛かふ夕闇
の空に水鶏の扣音美景物としてたらすといふ事なし中にも
三上山は士峰の俤にかよひて武蔵野の古き
栖もおもひいてられ田上山に古人をかそふさゝほ
か嶽千丈か峯袴腰といふ山有黒津の里はいと
くろう茂りて網代守にそとよみけん万葉集
の姿なりけり猶眺望くまなからむと後の峯に
這のほり松の棚作藁の円座を敷て猿の腰
掛と名付彼海棠に巣をいとなみ主簿峯に
庵を結へる王翁徐佺か徒にはあらす唯睡癖
山民と成て孱顔に足をなけ出し空山
に虱を捫て座スたまたま心まめなる
時は谷の清水を汲て自ら炊くとくとくの
雫を侘て一炉の備へいとかろしはた昔
住けん人の殊に心たかく住なし侍りて
たくみ置る物すきもなし持仏一間を
隔て夜の物おさむへき所なといさゝかしつ
らへりさるを筑紫高良山の僧正は加
茂の甲斐何かしか厳子にて此たひ洛に
のほりいまそかりけるをある人をして額を
乞いとやすやすと筆を染て幻住庵の三
字を送らる頓て草庵の記念となしぬ
すへて山居といひ旅寝といひさる器たくは
ふへくもなし木曽の檜笠越の菅蓑計
枕の上の柱に懸たり昼は

人々に心を動しあるハ宮守の翁里のをのこ
共入来りてゐのしゝの稲くひあらし兎の豆
畑にかよふなど我聞しらぬ農談日既山の
端にかゝれハ夜座静に月を待てハ影を
伴ひ燈を取てハ罔両に是非をこらす
かくいへハとてひたふるに閑寂を好み山野に
跡をかくさむとにはあらずやゝ病身人に倦て
世をいとひし人に似たり倩年月の移こ
し拙き身の科をおもふにある時ハ仕官
懸命の地をうらやみ一たびハ仏籬祖室の
扉に入らむとせしもたどりなき風雲に身
をせめ花鳥に情を労して暫く生涯の
はかり事とさへなれハ終に無能無才にして
此一筋につながる楽天ハ五臓の神をやぶり
老杜ハ痩たり賢愚文質のひとしからざるも
いづれか幻の栖ならずやとおもひ捨てふしぬ
先たのむ椎の木も有夏木立

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢也何處無山川
風景因人美也閒讀芭蕉翁幻住菴記乃
識其賢且知山川得其人而益美矣可謂
人与山川共相得焉迺作鄙章一篇歌之
曰

琶湖南兮國分嶺
古松欝兮綠陰清
茅屋竹椽纔數閒
內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覽
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具草

几右日記

時雨る背中見えてゆく藁ゝの那　曲水

くらまの僧も川か也文の山　野水

鶯かたらく時ちの鶯かな　去来

海山にみ月あるや一しくく　凡兆

新ちるき苫利塩みゆ礼様のあり　千那

田径のすゝきのや、衣のまま　珎碩

贈紙帳

おりつるや我帳にみけと綴りけり　野径

いねさまて蕨の菜にかいらるる花　里東

菜の花男の其中にけの露　乙刕

都や藁の中の花かつき　膳所 怒誰

ゆふく一夢に鶯ちる宵雲　探志

日暮雨羅衣袖みへ之る　元志

水つきありけし寐るる鶯か　日 泥上

笠あふ川猿まくしや風の色　史邦

月待や海と荒月りみえるこ　正秀

瀬川のさゝ小葉の花に流む清水　古人 柳陰

涼しさや雲のにみ有む稚り本　如行

鶯り鶯やあきり

稚ありをふみて嗚やせつもの香　膳所 朴水

同のりや高流れかくは海源し　美濃垂井 市隠

文山云乙す

猿筋藁や早苗の中けふ夕涼　半残

麦の粉を土産き

一吹きれや香の田のとし麦　之道

書音

まの葉かる山さへうりや眺藤すき　長崎 魯町

夕立や椿木の奥の一ちょうり　及肩

昇猿腰掛

秋ゆ何田との山のくゆうなより　尚白

贈暮

さくら香もまてあらしの中くく木　北枝

水條めく情ふまつる花の花　木節

包紙ニ書

後ろふて寒菊や萩の香　膳所 翁

稲の花これを佛の土産かな　智月

石山や行かて果せし秋の風　羽紅

桐の悔やきられてのちのむきかくさそ　昌房
里いつも夕めしどきのをきさゝげ　何処
蜻やはらはら境ふちぐりのかまをとる　越人
越人と同しく訪ふ
蓮の実の飛ふ庵入る卯　等
明年孫生長旧庵
ますみやほしき果ほとの月　嵐蘭
同夏
ましらさや此竜ぎえ人過行し　曽良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比
彼山寺倫衣朝市須冠笑只任心感
物写興而已矣洛下逸人凢兆去来
随翁遊学棋舘竹窓躐等凌節斯有
茲撰此集玩弄無已自謂絶超狐
腋白裘者也於是四方陰友憧々往
来或千里寄書々中皆有佳句日蘊
月隆各耀文章然有昆仲騷士不集
録者索居竄栖為難通信且有下蔗倪
婦人不琢磨者上麁言細語為喜同志
雖無至其域何棄其人乎哉果分四
序作六巻故不遑廣捜他家文林也維
旹元禄四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽
旅亭偶會兆来吟席見需記此叓題書
尾卒援毫不揣拙庸幾一蓑高張有補
于詞海漁人云

風狂野衲
文艸漢書
正竹書之

續猿蓑

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる声　沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧
内はどさつく晩のふるまひ　里圃
きのふから日和かたまる月の色　沾圃
狗脊かれて肌さむうなる　蕉
渋柿もことしは風にふかれけり　里
孫が跡とる祖父の借状　莧
柄さしかへてほしがる脇刀　蕉
煤とるやうへはけや隣の隙　沾
約束のかゝるとつけ賣に来て　莧
十里ばかりの余所へ出かゝる　里
笹の葉に小路埋ておもしろき　沾
何となう何なと門の書つけ　蕉
いつくへか後は沙汰なき甥坊主　里
[illegible]門と出て京の尼つき　莧

有明におくるゝ花のたてあひて　蕉

見るにそろへて撥のさえ口　沾

集めては又は川原札を作るまじ　莧

伊勢の下向に舟つゞきけり　里

若輩に仲間をつかふてまつりと　沾

くらがりて家の晴るまつり　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里

机の角のこてぬ虫穴　莧

泣出しの手より帳をとりにて　蕉

なれぬ娶りいやがりて内儀　沾

尾張より侍衆元のおそろひ　莧

蘇鉄の葉のたえぬさま〴〵　里

むめのすみて露ちる梅もむくの声　沾

伴僧をしる駕のわれ　蕉

割かけにもち力坂の宿の風　里

まがふらん星のこぼれかゝれる　莧

門さして浮世に露ある身をやさき　蕉

さ川を霧のうおとして菊　沾

菊の花やゆつぬ壹のくされて　莧

淵ばらのみなる今の事人の有　里

雀の字や揃うて渡る鳥の声　馬莧

てり葉の岸のおもしろき月　沾圃

こゝろよと置てたゝれハ秋萩を　里圃

小川しあうとのふく井酒　莧

霜くるる宿替に子をもらふ人　沾

遠と発て　かの洗足　里

悔しさハ子の心の身をとあひ　莧

後状よんで　まゐらする　沾

よきさゝる家内の赤飯きるゝ　里

まうけしまくる　園方のあか　莧

行ほとにあめくてさき　稲むしろ　沾

風かくれゆくる猿の樵乃月　里

當所　秋のまゝかれにたえく　莧

庄屋のむすこ　女房ほしがる　沾

はやつる伊勢の宮前のしく露　里
蕎麦はまつくされたる一陣　莧
俵屋をあらためて宇治の蕃望　沾
まだ静なる芋乃深爐　里
しらひ其の頃の宮を掃除し　莧
ちかみぬ合点らく始うてゐる　沾
まくらにかくちの花に申出て　里
に餘寒の前のかさむる　莧
汁の実にてゐる茶子のお茶く　沾
ありさむ麦をまいり菜くくる　里
わざくに寺の掛図を出さし　莧
筏のあとのあとは構しき　沾
跡をくまくらつるめ小商ひ　里
早下して夜ふよひ料理くへ　莧
私く秋ふ寄りの舟　沾
新くらいて此世の声　里
此色は實の毎のあと聞く　莧
育付ての出羽の花内　沾

雲のあいさ帷子時のかちひ雨　里
惜て家傳よろし秋葉の風　莧
花のうけ葉をとらる所の菊入り　沾
何の用の土のうらくうけるへ　里

いざよひは川音高る嵐かれ　里圃
こゝのまさきの字なくらう光　沾圃
大根のそくらぬ土うられて　芭蕉
上下をうす胡菜のむ秋　馬莧
町切小片之の所の葉め流　沾
若ちゃうちくしてあはるる沢　里
新無花院の祭りの序桜ぞく　莧
ゆうつの深き楓かやく　沾
姐の錦りあとうけつのし　里
日利く来をよい菜しあり　莧
状箱を持つの花押らけたる　沾
まことやるそなをゐ日の亂　里

草の葉にくゞみの有る風ちから　莧
浄狗毫らゝ綿とりの雨　沾
うき旅ハ鵙とつれ立わたり鳥　里
又所かゝり明えけるそら　莧
紫苑の花の中より浅つき出て　沾
柳の傍へ門をたてけり　里
百姓になりて世間の安さよ　莧
乙まえと揺ふあつめ佐官衆　沾
浅黄の濃浅つくしおろし立　里
くふのありさまてよくかせぬ　莧
袴を遠ふ蘇の中の絡(ギ)絲(ス)の夢　沾
おと人かいひ出しとく浅　里
火燵の火いけて独居を来ならせ　莧
一ろふそく　雁の床　沾
折しくハ実月の紀る夫宮ね　里
汲ふ加減のちうふおさへさ　莧
目も有りこゝはたゝとを咲てける　沾
切かれの手にかけ不孝編て取柄て　里

夜狩小姫と中川く姫のそれ　莧
家家の花とこちく北立る　沾
花のあし蹴鞠のくとう抱ひしら　里
寺のひけくる　山法の夫　莧
恋よりハちとくなゝあかし池の鶴　沾
一篇ふりてあくうかれ風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日ハ寒けれと静なる岳　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然
鶏があがるとやがて暮の月　蕉
通りのなさに見世たつる秋　考
きちまひ一荷て直する鮹の臭　然
昼寝の霜となりしらみかゝり　蕉
聟が来てにつともせずに物語　考
中国よりの状の吉左右　然

翌日の月ハとらんやらふ振舞れ　蕉
一夜も織をたゝくらぬる　考
きさんじな青葉の比の樅楓　然
山より門ある有明の月　蕉
初あらし畑の人のかけまはり　考
水際光る濱の小いわし　然
見てゐる紀三井ハ花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
こち風の又西になり北になり　然
わつさりと脇をたてるうちらるゝ　蕉
浅草の門跡ハ今寂まくら　考
喧嘩のさたもむざと出られぬ　然
大せつな日が二日ある暮の鐘　蕉
雪かきわけし中の泥道　考
来る程の家に鍋出す旅なれ　然
奥の世並ハ近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鶏頭を庭の正面　然

宮守が娘のこゝろハよし川見　蕉
康汁のとまる今朝のこの愛　考
手の跡をとつて引おそ年松の風　然
大工つかひの奥に出る　蕉
米俵をくゞるあいやうに置かへし　考
うち明て市の中を打あるく　蕉
此あたり沙干大荒乃けふれて　然
鶏のあつらのまさとめけぬ夫　考

今宵賦

野盤子　支考

今宵は六月十六日のそらみづにかよひ月ハ東方の乱山にのぼりて衣裳に湖水の秋をそめたれバ今宵のあるじひとしきものより遊び甲の座をかざりていざやとちめくに斯てふよくならぬかはむれかゝる人もなく山とかおのれこそまくかゝりたる人ぞく さらぬ人をもいさゝめにあり給へあ

なにかしの年のくしこからかくれ住侍し此岸のほ
とりにさそひ来の草ともなひしむる處を
つらて許される所ハ膳所の草庵にて
のなる秋ともいさりめくらしいつく明月の
あそひをとらへて伊賀の山中に江戸の古
蹟をとふらひ給の[illegible]山に[illegible]
加茂祇園の涼をしのとそたくいてや
此山ハ秋をまち眺たる人そありけるにされ
ハ湖水の納涼をしらぬ眺ありてまた
三日月の景色を嘆く[illegible]の鴨
とらむ今宵を茶店氏をあまし
て修あり俗にありて修に似たる
ものあれとそのすしらのありきものハ[illegible]の
岸に小松をおひしたるにて涼しく[illegible]
またこれを川岸にありしてみなあつき
なり貴人あつかひしくのさしむき
てわきへるる似くれと折来てよろ
こへる鳥の[illegible]ひておかえす鶴

鳴く羽をのこふとこりかやましてなかなる
比をに時とかきとの方へとんさしけされ
しを支考とい世の方に縁ところ来て
時るの汀ハむかへもかなしいかのふあり志
かしそ湖のみるの中のてあらくかく
とうされてい河の比あそひにおかれなん
[illegible]の今宵に茶のよく此年ハいまたき
きそらん今宵の無常おそてあらそ庵なれ
そころに移く候へるもの あくも四対の数
みんとのまたんとなれ あらはぬ

[illegible]　芭蕉
[illegible]　曲翠
[illegible]　臥高
[illegible]　惟然
[illegible]　支考
[illegible]　芭蕉
[illegible]　翠

山からに石に名を書て出しける　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然
きゝて十歩と志てる思律　考
おのかうり斎にもまうて橋の霜　蕉
持佛のかほに夕日さし込　翠
平畦に菜を蒔立しそこ縁　考
秋風わたる門の居風呂　然
ゐる川て膝そろへ初る月の影　高
尾張てもつきしつものゝ泊なる　蕉
縁好の事しのびにあらはれて　翠
西日はれ北く襟をよせさせて　高
其風なり善請のつゐに作之　然
藪からか村くぬける裏道　考
喰からぬ聟も舅も口きゝて　蕉
何ぞの時なと出仕つかなる　翠
篭張とと棒に付くるたきさし　高
薮こへる卯月ゆきの末　蕉
相宿と跡先になる川添木の町　考

隙の日和なり宮の気色　然
呑ところもせぬ酒の小升し　翠
花盛の旅を車へあけける　高
封付しふみ箱来る月の暮　蕉
そろ〳〵寒く盆の上臈　考
重箱つるは宗の角の河原町　然
ある所をあくる表一囲　翠
今のまに陽とみえくれ桜の上　高
たゝされ侍のどさん小咄る　然
豊なる花にと庵おりよせて　考
猫かけつゝし藤棚の下　高

春之部　花桜

温石のあかるゝおそやまつ桜　露沾
菜時分に又みん日もちる桜　其角
顔に似ぬほつ句も出よ初桜　芭蕉
ちらちらや麻の袂くる花の山　洞木
角のかれし人もかゝらや花の友　文草

花散て竹見る軒のやすさ哉　洒堂

留主もれる酒屋にあそひて文字の風雅

中将のあそれにもひはなちるゝに　惟然

酒部屋に琴の音きかせよ宮の花　支考

賤ふして帰さおくらるさくら狩　沾徳

人の手にかく寵ひしても桜　猿雖

くもりけり世中の花の小面　陽和

ちるよりさきへ知る世中に　乙州

見えぬおりふしころもや先川桜　木節

咲花とむつれし雲雀木の末　沾荷

ころもやふりえぬ見え散らす桜　子珊

二の膳やさゝゐ吹ても鯛の鼻　卓袋

善光の出方にひらく桜かな

田家

蒟蒻の名物とせん山さくら　李里

咲かゝる花や飯米五十石　桃首

山門に花もめくしき木のふとり　一桐

なかれ木の根やあらはるゝ花の瀬　如雪

花笑とよせて酒のむ人ハ誰　其角

それもゆふも雲床なれハ花の春　少年 一鷺

めりやすの旅もの花やめりやすの花　卓袋

一日ハ花見のあてや旦那寺　沾圃

八重桜京にも移る奈良茶哉　仝

若菜

濡縁や薺こほるゝ土なから　嵐雪

粟の叫むし泥のこゝろ菜かれ　曲翠

夕陽の舟ふきこほる薺かな　孤屋

一かふの牡丹ハ若菜すへ若菜かな　尾頭

梅附柳

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

きさらきや大黒棚し梅の花　野水

ちる梅のあはれハ堂を咲花売　其角

里坊に碓きくや梅の花　昌房

投入や梅の手ハ蕪の暮　良品

病僧の庭はく梅のさかりかな　曽良

あたらしき茶袋ひとつ梅の花　万乎

花ちるや梅の陰まで下流の紅　魚日

さゝ梅やくしくふかさにかれきぬらう　千川

春雨や梅のあるじといふて散ん　大舟

天神の社に詣て

身につけと祈るや梅の雑きぬ　遊糸

それぞれの鶯のなくや梅柳　千那

時しいふちちる川柳　意元

ちるなと散くちりしや古柳　江東　李由

まる橋のまくれてまゝやるの曲　九節

帰るとうけて見る魚る柳かな　巴丈

鳥　附魚

鶯に長刀かゝる承塵(ナゲシ)かな　其角

うぐひすや啼く囀鍼の風なり　史邦

鶯に手もと休めん長しもと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

濡縁もひしけと雉の鳴ける　去来

春雨や蕪につゝまん雉の声　洒堂

鶯の日もさやとらへ枝に　傘下

鶯の音に脱かゝる白頭巾　長虹

燕や田をきりかへて鶴のあと　野童

巣の中や身を細うして親燕　少年　峯嵐

雀子や姉にもらひし雛の櫃　槐市

蝿うちにかゝる雀の子胴ふ　河瓢

乙鳥や東風につれての磯ゆるみ　釣幕

芳野西河の瀧

鮎の子の心すさまじ瀧の音　土芳

かけろふと共にちらつく小鮎かな　園水

しら魚の一かたまりや汐たるみ　子珊

白魚のしろさや明てあくみへし　山蜂

淀川にあそびて

しら魚をふるひ寄たる四手かな　其角

春草

なかくて又蔵くゝ川世帯や春の草　正秀

若草や松につけたる凧の道　吼筋

春の野やいづれの草にかぶれけん　尼　羽紅

川淀や淡をやすむる葦の角　猿雖

宵の雨あるや土筆の出くらう　闇樗

味ひや桜の花によめかたき　車来

落たつる吹かふものを鬼あざみ　荒雀

垣よりこちらへ落れは葦の芽　馬莧

踏あらく土筆の切目や蒜の根　拙侯

ふくる雨も形に花さく土大根　乃龍

まかれしや茎より山の椿から　正秀

味噌部屋のあかりはや肥ること　夕可

日の影のくり猫の抓るる摘涼かや　一桐

蒲公英や葉のひそくめ花蓋　圃落

猫恋　附胡蝶

こゑ鈍や月ふちかた帰猫の恋　探九

うき恋にたえてや猫の盗喰　支考

おもひ切る其の夜もくける聲猫は　美濃　己百

白日志川の他

ともかくも趣い節く胡蝶哉　柳梅

衣更見のうちやさきさき蝶の夢　惟然

蝶の羽のあり川を渡うかをちる　闇指

風筋に鶯の聲すすむ蝙蝠かな　出羽　重行

名残して花にせつなき胡蝶哉　雪窓

春鹿

振廻しぬや鹿の春の角　沢雉

春耕

娵の里のあてなり桜麻　木節

菊札や笠絶おもての青田かな　此筋

千刈の田をとうつくし難波人　一鷺

桃　附挟

白桃や雫も落ず水の色　桃隣

今様は艶まかり桃の花　介我

伏見かと菜種の上の桃の花　雪芝

梅さくら中をうつけて桃の花　水鴎

花さそふ桃や歌舞妓の脇踊　其角

江東の李由が祖父の懐問の法あれ
おのつく經文見のなか魚に御經の
先ものとりふるゝと
似錦に先とやせまし　まつりさき　角上

梅は枝も垂に花咲く梅の丸　　残香

見あたらぬ花や梅のあるその宛　　洞木

ちり梅あまりわたるに椿てゝる　　野坡

款冬　附躑躅藤

山吹や垣に干さるゝ簑一ツ　　闇指

田家の人に對して

山吹に並んで餌まき花　　洒堂

岨おちし己の様や蝋のより　　雪芝

藪畔や梅のとりつく藤の花　　荊口

春月

山の端にちらちら白き春の月　　長崎　魯町

春雨　附　春雪　附

おほちさきその花のかたの春雨　　荊口

吹つくし調子合わう春の雨　　乃龍

春雨や眉丸ある鸞とゝる　　游力

なかかりし主馬が武江の旅居を

とふらひ侍

春雨や枕くづるゝうたひ本　　支考

春雨やもの書ぬ身のあはれ也　　桃首

はるさめや蓑かひ込し春の笠　　凡兆

はらはらと椎の落る石の直　　風睛

汐干

のり帆の跡を見れぬ汐干かな　　去来

小川小鳥のすみれや汐干かな　　闇指

雑春

出がはりやあはれ勧る奉加帳　　許六

若草やまくさも載る桐の苗　　風睛

是程の松のちくちや若緑　　土芳

うけとりや暑かりし桜の趣かな　　配刀

小麦ふしのゝかれや蝶の影　　万乎

おそ梅に掛る揚や市の中　　苔蘇

衣の方に川雀かれやめだけ朱　　美濃　均水

そのりや菜の花の中の小宮哉　　正秀

三尺の鯉をめされ春の池　　仙花

引ずるの中に交りぬ田螺とり　　文浪

三月尽

祇園を白燭愛の名残り哉　支考

歳旦

[illegible]　少年 武仙

[illegible]　百歳

[illegible]　尚白

[illegible]　圃落

丹方の[illegible]　山蜂

詩にいへる玄黄と顛倒[illegible]
と老父の文に[illegible]

元日や[illegible]の書　千川

人もみぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角

楪の世阿弥まつりや青かつら　嵐雪

万歳や左右にひらいて松の陰　去来

[illegible]　土芳

[illegible]　凡睡

元日や[illegible]の花　猿雄

[illegible]　蔦雫

[illegible]　野童

[illegible]　耕雪

[illegible]　左柳

[illegible]　前川

枇杷の[illegible]　斜嶺

世の中や[illegible]　山蜂

[illegible]　任行

元日や[illegible]の器　竹戸

我宿[illegible]　是楽

[illegible]や餅に和らぐ[illegible]　沾圃

[illegible]　圃角

夏之部

郭公

暁の雹をさそふやほとゝぎす　其角

ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草

[illegible]　曽良

蜀魂なかぬ夜しろし朝熊山　支考

啼聲のかをひせまるあつさ哉　如雪

巣の底ありしむしろや郭公　芦本

淀よりも勢田はなけれど子規　子艇

此句は高山の麓にて眠花の露ふく
各ありとや

郭公かさいの森や中やどり　沾圃

木附草花

橘や日ふところくる家の前　闇指

里〳〵の姿かはらぬ家もなし　野荻

園中二句

此中の古木ハいつ川も柿の花　此筋

垣切の若葉柿の家ふり　千川

姫百合やよりかゝる麻の条　素龍

題山家の百合

白百合や垣根を隠す身のおもひ　支考

山ふかし子のぬれてゐや杜若　尾頭

淀汁ハ谷にたまりし杜若　沾圃

このしくゝあらふるかも杜若　伊賀 宇多都

家葉や若子の花に虫つく　拙侯

花を残る鳥の返具

蓮のかやりくりとなる花火　沾圃

夕顔や酔て顔出す窓の穴　芭蕉

夕顔や裸ておきて抱あぐる　亡人 嵐蘭

蓮の花をちらして寄る入江哉　残香

蘭の花よりこくらの露のかね　此筋

茸の花やもみかれさるに蝶虫　白雪

あのあらし苦ふ苦の味おかしさん　良品

瓜

あさ露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

姫瓜や袖につゝみもすべる程　至暁

おさん

兼ねたる結ハぬされぬ牡丹哉　風弦

早苗

京のやゝる程の田植の端の中　長崎 卯七

子が母に結んでゆかん笠の紐　闇指

ふるゝ身の植かくれたる早苗かな　魚日

田植等のまじりて来る聲の風に聞し　重行

一日の?めぐりて也?の音　北枝

早苗の?ゑ?搔る早苗?れ　文考

蛍

故里の人の?に?る?ほたる　許六

こよ?に?の?いは?のり　野荻

納涼

涼しさや牛?の?るゝ　半残

?草や?の?に?の?　惟然

涼川の?小?して

ささ?や風に?なる?の?涼　史邦

涼しさや?の?の?　重羣

石?門?の?　長崎　杜年

涼しさは?の?て川の?　万乎

漫興三句

涼みけて?の?しき?　洒堂

涼しさや?に?る　支考

生?をねらふ?涼の?　雪芝

?の?を?に?て　游刀

いそがしき?の?涼?れ　仝

ゑにあかし?れて?に　去来

踏れふる?や石の上　正秀

職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳

涼しさや?の?の風?　我眉

夕涼や?のえせい?　里圃

盛夏

かくれ家や?のし?の?　野荻

?のえせの?の?に　万乎

?老の?の?に?

けふもまた?の?の?れ　正秀

?の内のあつさや?ひ　乙州

?る?あつし?　怒風

?の?の?の?　素覧

草の?の?て　我峯

はつきりや前後さらりと余所の鶏　卯苫
姥ありて火もさしかへす時鳥の聲　卓袋
粽ほどく地ほ松のあつさかれ　里東
立よればむつと浪花の暑かれ　沾圃

行々子

葭切りや一かた岸の崩うちよ　可誠
よし切や蝉のかはるまさきの宿　曲翠

五月雨　附夕立

五月雨や枕もとなる徽雨の中　出羽 不玉
さみだれや蠶煩ふ桑の畑　芭蕉
五月雨や蜂よせられぬ破つゝみ　沾圃
夕立にさし合たる日傘　拙候
白雨や蓮の葉たゝく池の芦　苔蘇
夕立やちらしかけゝる竹の皮　暁鳥
ゆふだちに傘かる家やたゞ一町　圃水

蝉

白雨や中座りして蝉の声　正秀
きさ川を來て涼しく蝉の声　朝故

夜の蝉涼しきやあつき蝉　乙州
蝉啼やめの織宗の寄時分　暁鳥
この川を
蓮の月や湖ちかき小川鯉　巣蛤

雑夏

昼寝して手の動やむ団かな　杉風
虫の喰ふ菜ハ花しや寺の畑　荊口
なる瓢ねぢれひの中のひるかかり　伊勢 如真

川狩ふかく

夜網や声ちかくして柳鮠　文鳥
夏草に[illegible]こもの花や園の紫蘇　葛雫
夕暮ハおとろきもなし蛍の[illegible]　水鷗
せきれいとまる小池毎をかへて
魚ある幸ありて涼しき　馬莧
杉むらや荒れて日の雨　重翠
沢潟や身寄るかたの汐　野童
蝸牛つの川筋のそよさに　水鷗
晋の淵明をうらやむ

宗祇もどり宗鑑の像や簟　芭蕉

粘りとれ帷子かゝる宗祇かな　惟然

貧僧のくらしもみその宗祇かなしく
よすがらふきふ夏日の洞源か爾
みえて世のふしぎに交る

帷子のむかしは世にもためし洪大百　支考

穐の部

名月

名月にふもとの霧や田のくもり

名月の花かと見えて棉畠

おもしろく伊賀の山中にて名月の
秋この二句を吟し出してそれぞれに
いづれか然るべからんと侍しに此るやの
川へうちて月と中川ともに根の寺にて
きわめて心あるべき御時分のれと
あるべきかなしのかたりて平田拙くと
芳様なりかなし

ま(?)つくる老杜が唯雲水のごとく
といへる山色のかゝる折ふしその
次の棉畠けいは言外に兼かゝく
なきれはかりいづれか今のこのむ
所の一節に依あらん月のこゝろの見
るたかきかなと花とも云べく
そうりなし々ちかきにえりし花に
清香月に深あり今の詩人の
ひとつにまつくはの寂寞とも
もとより清くかきみなへ思ひ
何を花とも云べくとなす
清の人なかれあるべし

支考評

名月の海より冷る田薑哉　洒堂

明月や雨りかくして旅の月　如行

かのくのくら桂にもんほんふ　露沾

ふくもり川おくいつかりしかちんかのの月　智月

名月や長屋の陰を人の行　闇指
明月や更科よりの留主の奴　涼葉
明月や灰吹捨る陰もなし　不玉
中切の梨に實のつく月見哉　配力
名月や草のくらみに白き花　左柳
明月やたえずの松に人のかげ　圃水
声すみて北斗にひゞく砧哉　山蜂
明月や庵めかしき門の月　風国
名月や何ある人のゆくへ哉　雷笑
昔の名ハ今宵の月に見てしまふ　重友
明月に見なれしよその哀なり　泥芹
いせの山田にありてかへるの歌と
抑かの云へる事に
二つ三つ落て雅ころぶ月見哉　文考
芥子蒔と畑まで行ん月見哉　空牙
柿の名の木曾も栗木に月見哉　如真
山寺のちからや庫裏や芋の月　宗比
名月や里のしるしの荏子葉　木技

堀に居て月見あかりや蓮棧　利合
明月もはなしまじりの座中方　丹楓
明月や何も拾はぬ秋の道　野荻
花入のおよそしれたる月見哉　正秀
淀川にてはるかに月をまつらく
舟川のたるゝよく月見哉　文草
鎌倉の月に寐られじ宮の御所　景桃
家に三老女といふ事あり云文字ある
秘してつたへ侍りしといへるに書て
姨捨を闇にのこすや今日の月　沾圃
乗掛さきて月入あとや旅の空　馬莧
菊もなく月見くらしぬ梢に　里東
風のなやかの夜さくさも秋下　牧童
深川の末五本松といふ所に船をさして
川上とこの川しもや月の友　芭蕉
十六夜はわづかに闇の初かな　仝
いさよひは闇のかゝりのはつ尾花　猿雖

○七夕

更行や水田の上の天の川　惟然
星合を見置て語れ朝烏　涼葉
わかれのさきさかりけり星の影　東潮
たなばたにとりつく雨や星の宿　沾圃
初風や薫照の圓かち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に片よる今朝の秋　露川
秋たつや中に吹るゝ雲の峯　左次

秋草

ゑのころの花遠見も桔梗かな　柳梅
細道になりぬ桔梗のつぼみかな　随友
女郎花ねびぬる昔の姿かな　濁子
そよそよと桔梗の花もうつれけり　馬莧
一もとは萩にちらし畑道　鳥栗
予園とられたるや萩の花　文浪

贈芭蕉菴

百合の花芙蓉に添ふる今宵かな　凡麦
さらぬ眼のさびしく来てすみれ　史邦

秋のかる草にものうしや朝顔　万乎
蕣や昼は錠おろす門の垣　芭蕉
蕣のちりかゝる露や朝なり　至境
おしてや萬小さき萩の露　雪芝
蔦かつらからむ秋の風　荷兮
山人の昼寝をしばれ蔦かつら　加賀山中 桃妖
風毎にさびしく蔦の紅葉かな　杉下

朝霧

朝霧の落かゝりけむ落月　田上尼
あさぎりの底にたゝる柳かな　闇指
あさきりにあさらかにして湯の底　凡麦
朝霧のかくれし人や葉帽子　其角

虫 附鳥

きりぎりすの持ちて焼むしろかな　女 可南
竈馬るや板にふみつくふところ棚　北枝
火の消て胴にまよふる虫の絆　正秀
秋の夜や鼾ときゝしきりぎりす　水鴎
この虫や形に似合ふ月の影　杜若

蜻蛉や何の味ある草の先　探丸
蟷螂の腹をひやする石の上　蔦雫
茎の實に籾をきくらんすゝきの空　示峯
ぬけがらにならびて死る秋の蝉　丈草
鳴ながら虫のながるゝ浦の水　馬莧
鶺鴒や走りまはる白川原　氷固
粟の穂を見あぐる時や啼鶉　支考
老の名の有ともしらで四十雀　芭蕉

秋風

秋風や二番たばこのねさせ時　游力
雀子の髭も黒むや秋の風　式之
何となくかゝへし秋の風　文考
松の葉や細きにたへる秋の声　凡国
おのづから草も高きと申しけり　圃燕
ふんだるや尻に巡りて実　九節
あれしくて来る山の雨もなし　猿雖

稲妻

稲妻やあかるかたより稲の皮　少年　一東
稲妻や雲にへだつる海の上　宗比
明方や稲妻光る雲の間　土芳
いなづまや闇の方行五位の声　芭蕉

木實　附菌

団栗の落る時は鳴なりけり　為有
炭焼に渋柿たのむ便り哉　玄虎
秋空や日和くるはす柿の色　洒堂
渋かろかしらねど柿の初ちぎり　重翠
初茸や沾ひて一茎　沾圃
伊賀の山中に何叟の草庵を訪ひて
松茸やかぶれた程は山の形　惟然
松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

杋

淀の舟の夜も明けくる村の家　北鯤

鹿

尻声に長門の鹿や風の音　凡睡
夜明けりに鹿をとる手の峯に　一酌

農業

續猿

起しせし人は逃けり蕎麦の花　車庸

木の下に狸出むかふ穂懸かな　買山

さまつける頃となりけり畦の稲　如雪

いせの斗従に山家をとはれて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉

手鍋持く旅つきうけや小百姓　乃龍

山岸のそこやかに鳴雀の稲　斗従

麻のよさに何の粟蕨まる小蕎麦畑　支考

手ぬれの衣や苧のきれんと刈　仝

帆きさき鶏にあつかし蕎麦の茎　惟然

百舌なりて袖を通くしし　木節

太師河原にあそんて桜狩にちらん

かのつ狩に過ひそつ

その山や木戸の花の庭　沾圃

菊

菊の子二百十日も恙なかりし　蔦雫

ありしころやおも白菊の咲に　潟子

鶏頭の手折に宿し菊の花　支考

題画屏

むらさきもえうる山路の菊の香　几峰

猪のけし庵の跡やかの菊　文草

暮秋

広沢や背負て帰る秋の暮　野水

行秋を鼓弓の糸の恨かな　乙州

行秋や手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雑秋

あを干浜鳥つゐばみし殻一ツ　之道

霧くもの山おろしくらん松の中　団友

ひらひら鷺の羽ちらしておちかかな　畦止

沖の竹やさえれ時出る秋の雨　四友

身ふるひに香のとかく鞍に　荻子

文月や猪とくれの月ひかり　万乎

柿の実に焼くさき蓋らん落来　宗波

宇同る馬に宿に穀背くかのかし

穀とうまくて熊まるたを盡く

鳥羽の雑さくへの声くりはて木

生禿のとしなれとハいつの日の（や）
かことかんやかの猫と枕とく
淀ふ菱をわりをわくとそ行
このおおとおさくらのあはり
秋まやうわの心うか露の穂
そと残

冬の部
時雨附霜

こからしの煙の後目やきつ時雨　野坡
しくれ行又松風の只おかしき　北枝
けふハかり人も年よれ初時雨　芭蕉
一時雨まさこくとくり紅葉かな　露沾
初しくれ小鍋の湯気の菜加減　馬莧
手押して露用ひかわる時雨かな　野明
柴栗やいそくしくれの乗上り　闇指
稜雲を出よ芳野の御ゆきせ　空牙
宮鍵の出ては川も時雨る外　為有
冬もおもや清なふらるしくれ　鶏口
女小屋て香炉をあらく時雨かな　野荻
柿包むり松しきやむらしくれ　露川
こゝよりしくれて白し森時雨　里圃
淀ををとふさしの宿も初しくれの
　目利よりしてあかなかりなり
沖酒の瓶首ら時雨かな　沾圃
えつたや水のよのく礼の絵　北鯤
ひよ川集やつまふくのぶれの霜　支考

元禄辛酉九月
素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍り
其たハその比ハ花のまくさめくされ
やらせ菊花ひらく時則重陽と云
あるハ十日の菊ハ展重陽のこゝろ
なをさらにもあらさなか秋菊と
詠して人ことゝひかるゝ
かなりぬ
菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉

柚の色や起あがりたる菊の露　其角
菊の花咲や石屋の石の中　桃隣
八専の雨やあつまる菊の露　沾圃
何魚のかざしに置ん菊の枝　曽良
菊畠客も圓座をもちありく　馬莧

柴桑の隠士無絃の琴を翫しと
世の人に菊を籬のためしとなすを
むべなる哉造化のうちにも及べし
今その菊をまなびておのれつゝの
なりとおもひていさゝかなでゝ
琴あしらひけるにあらしやとゝく
我は河洞老人より琴を遺られより
是をかの菊と翫ひてあるとき
あるときは仙にあそびて風に念じく
あはせて

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友　素堂

草 附木

[illegible]や綿摘われし日の遠る　曲翠
茶に清く咲やこちの水仙花　氷固
水仙の花のこゝろや藪屋しき　惟然

范蠡が趙南のこゝろを
山家集の題に寄
一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉
山茶花は元より開く帰り花　車庸
冬梅のひとつふくらみ川やその声　土芳
山茶花も落てや雪の散椿　露笠

木葉 附冬枯

おのれの色木の葉ちるおや年の数　沾徳
冬さへてにの朝ひとむし落葉に　露沾
みな川や木の葉に見ゆる岩の肩　惟然
梅梁より見るくうらさ木葉さ　択風

卓柳坊宗比の庵をとふらひて

ともゝよりさきにてうる落葉かな　伊勢 一道
枯てこそ見かし細きや如竹花　杉風
牛の背の見くし枯野のそしろに　挑酔
冬枯に走りきて見ゆる落葉かな　乃龍

草枯にまろびてさえぬ鴫もあり　利牛

呼かへすのも見えぬあらし鷺の首　支考

木からしや色にも見えず散もせず　智月

凩や背中吹るゝ牛の声　凡兆

木枯や刈田の畔の鉄気水　惟然

こがらしや藁まきちらす牛の角　塵生

夷講

えびす講酢売に袴着せにけり　芭蕉

えびす講鯉も鴨にまぎれけり　利合

鳥 付いと

のとのつくとどんでく

塵ほどにくもりがちなり浦の鳥　句空

追たてゝ雪にならぶやうかれ鳥　蔦雫

水鳥ちるや寒中まちの風の帆　文草

入海や鴈の寝ぐらに鳴となり　闇指

鷹一つ見付てうれし鴨の足　芭蕉

川鴨を犬追かくるつゝみかな　旨木

波のりくるかげのつきあかりかな　利雪

鰯くは海に遠けれど寒さかな　車庸

ええ遠や子持ちのかれの鴨　岱水

一鳴にちつ白鳥や雪のおと　杉風

かこふ川や鴎ともなく冬霰　拙候

杜父魚は河豚の大さにてあるらん

鰒の鰭の川にながれてあらそひけり

冬月 附霜

冷かりのや門まであらく冬の月　里圃

あら猫のかけ出す軒や冬の月　文草

何となし枕ふすまや紙ふすま　小春

水仙や門を出れば江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

焼しくは松とならぬる火鉢かな　少年 桃先

負ふさや月を追ふ垂巨蛇　洞木

雪

初雪や門に橋あり夕間暮　其角

朝ごみや月雪うすき酒の味　仝

雪あられ人のこゝろをさだめさす　祐甫

鶺鴒家いとまりあく宿のこかね雪　蔦雫

さゝ川の千鳥を出る日のとて　文考

氏神や雪囲ひよる文草　聞吟

そうかたの雪くゝりや日数のおくれ　文草

鍬剃て雪打ふる陽炎　陽和

はや雪のあたらしき霜の花　配力

神楽

けふはまた神楽も寒き夜のかぜ　史邦

神楽や月の夜の神楽　路草

神楽さゝ千鳥まとふてかへりけり　馬莧

拍子の音も冬の夜の神楽かな　許六

灯を消してくらき神楽のけはひかな　沾圃

煤掃 附煤はき

煤はきや嵐をこえる竹の竿　残香

煤はきやあらはれ出る物のかず　黄逸

煤はきや下戸の庭の竹　馬莧

煤掃や部屋へ戻る竹の声　闇如（美濃）

煤はきや九月の神の朝のうち　惟然

はきよせて男ばかりの煤の宿　岱水

煤はきや女の手にも竹の丈　荒蘭

人のたつ煤の中より山の月　馬佛

歳暮 附節季候 夜配

ことしまで花の都の市の声　曽良

門松や年の暮まで世の中も　里東

舊年の市やよし春の暮　草士

節季候の来ても年の暮　車来

大年や秋の夜のごとく書きつけて　万乎

猿蓑の年の市に入あかりの暮　李由

年の市線香を買に出ばや　其角

年の市一夜たらずの暮　正秀

川端に人の袂や年の暮　荻子

桶の輪のあたらしき年の暮　猿雖

[illegible]　惟然

濱荻よ筆をつゝみてとしの暮

此句ハ圖司呂丸か羽黒より京に
のぼりて伊勢ゟまかりて故郷へ帰るを
をとゝしの暮かとよいひおくりて
今ハなき人となりけし

皆をかめ二見の七五三を年の暮　芭蕉
金屏に庫てとんすの衣の年忘　支考
旅人に薬ハやらぬ年の中　土芳
節季候や弱りて帰る藪の中　尚白
振舞ハの拍子もあつれ師走哉　少年 桃後
裁屑ハ末の子らか川名船　山蜂
一しきり鳴て静かに除夜の鶏　利合

雑 冬

小屏風に茶を挽かゝる寒さかな　斜嶺
洗ふ湯に風呂たてし庵の鐺　土芳
井のもとのうかしふれる寒さかな　李下
こがらしや山伏村の長つゞき　仙杖
寒ぞらのあかるくしや太鼓　圃仙
旧嫁より寒き時雨に扨寒かな　雪芝
山陰や猪の尻振く冬日向　コ谷
細枝り人冬の根の寒さかな　沾圃
菜畑やふくく菘の垂葉　杉風

釈教之部　附 追善 哀傷

涅槃

涅槃像あをき貝も目にて涙　沾圃
ねはん会や皺手合する数珠の音　芭蕉
山寺や猫さへ居るねはん像　不撤
貧福のまことをしるや涅槃像　山蜂

灌佛

灌佛やつゝしまるゝ井戸の雫　曲翠
ちる花や佛うまれて二三日　不玉
灌佛や釈迦と提婆ハ従弟どし　之道

竃祭

今あれこれあつまりし網まつり　嵐雪
蓮原のかくしやうき網祭　去来

續

[illegible]や[illegible]をとひとく玉[illegible]　沾圃

甲戌の夏大津に侍しをこのかみのもとより消息せられければ旧里に帰りて盆会をいとなむとて

家はみな杖にしら髪の墓参　芭蕉

悼少年　二句

うれしさや麻木の箸もおらぬ事　惟然

その紀をとりぬるものは秋の風　支考

〻鎌倉の龍口寺に詣て

[illegible]　木節

[illegible]　支梁

内新綿

柚の香もともおもはれず[illegible]新綿　沾圃

臘八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六

何のあれ[illegible]大師講　如行

雑題

洛東の[illegible]　素葉

臥帳の時

[illegible]念仏かな　去来

あかあかと二十三夜の月　智月

[illegible]畑や[illegible]仏達　乙州

ものゝふの川越ふや[illegible]仏達　重翠

手まはしに朝の間涼し夏念仏　野坡

食堂に雀啼なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏ばせを翁の別を見送りて

麦ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

おもしろや柿くひふる坂の上　惟然

許六が木曽路に赴し時

旅人の心にも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より古郷に帰る時

[illegible]の草をとらしけり　丈草

鵜の子のたつく夜送る谷の水ハ　芭蕉

甲斐のこのふりに待りて附
宮城の山ふところにかりて

手よりて斗にのりけり萩の露　木節

稲妻や浮世をめぐる鈴鹿山　越人

いつもふくつゐ川柳や桔梗の露　野径

出羽の雲やまにもしばらくとどまりて
のほりひとりまかる

ふるさとハ苔ゃ花ありし小萩原　公羽

十六夜ハわつかに闇の秋の風　許六

大名の寝間にもねたる夜寒哉　仝

名月の夜

ささなみや菊にさかぬ白の猿　曾良

つくつくハおもへはあたる木の葉哉　猿雖

明けのハたちきれくし猿の声　我峯

寒からで物語ありし京の月　史邦

田國のかさしも添へし世のならひ

風雲の舞ひけハ秋さむし　出羽人 呂丸

我蒲團いくくも猿の宿かる郷　沾圃

常陸の國にてあるひとの所に
行暮て宿り求めんとせしに折ふし
秋はきものありとて宿をことはり
けれハ一秋別時の転のりかかり
まかりく

猿を舞る猿や梅に小豆粥　支考

吉川所やさらふれつゝも砧うつ　仝

元禄四年の冬粟津の草庵
より武江におもむくとて嶋田の
驛塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらする時雨哉　芭蕉

聖和學園 短大
第 2907 號
受入
昭和 30. 9. 5.

911.32
八
下

分類番号 911.32
図書番号 2908
巻冊番号 192
聖和学園短期大学図書館

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあらのといふ何故に此名有事をしらす予はるかにおもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の言捨をあつめて冬の日といふ其日かけ相続て春の日また世にかゝやかすげにや衣更着やよひの空のけしき柳桜の錦をあらそひてふ鳥のをのがさま〴〵なる風情につきていさゝか實をそこなふものもあれにやいとゆふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにうつろひて姫ゆりのなにゝもつかず雲雀の大空にはなれて無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと此野の原の野守とはなるべし

元禄二年弥生　　芭蕉桃青

曠野集

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の芳野山　貞室

ゆまくらにいひちらる花のあらしかな　路通

落日をうけころくれぬの林かな　信徳

それの山ところまつらく寺よまむ　晨風

暮淋し花のうしろの鬼瓦　交五

山里に喰ものしゐる花見かな　尚白

何事ぞ花みる人の長刀　去来

みよしのの花まてこしハ花のみやるべし　野水

ちる花のあちらこちら引こむる庭ぞ　亀洞

かくのまに宮といはまへん花の宮　越人

花の山常折くぶる枝もなし　一井

見あげしうふねあるぬ花の隙　津島 俊似

見ぬ月のいろはあまりの花の時　鼠弾

ちるまをそれハ酒ぬき人よく　舟泉

冷汁に凝てもよしや花の陰　胡及

ちる花に雛の傘そいはまくし　長虹

紫に花咲かかり宵の雨　津島 卜枝

ちるときになのりて遅ざり花の枝　岐阜 鴎歩

連てく川や遠月はさびし花の時　荷兮

痩斎の跡まくさける花見かな　傘下

あらけなや風車売る花のとき　薄芝

花に来てつくしくある心かな　さつ

山あひの花を夕日にみおろしけり　心苗

おもしろや理窟はなしに花の雲　越人

なりそへや初花よりの物見貌　野水

独来て友選びけり花の山　冬松

花咲とこけら昔ある庵よりに　冬文

肴もりて草の花見よ鮑とも　荷兮

酒のみ居たる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の山家にいたりて

橿の木の花にかまはぬすがたかな　同

杜宇二十句

ほとゝぎすさそと問ふくものゝ求ほとゝぎす題

香餅の夜月見えつらんほとゝきす　李吟

月にハまた山ほとゝきす聞かりき　煮堂

いそのしきなくにはなれり郭公　釣雪

蝙蝠のひのりかゝしや蜀魂　越人

ねひしろのほまゝまるや時鳥　沖島 松下

跡や先気のつく聖ほとゝの声　重五

ほとゝきすもとれらきるむ明の霞　柳凡

ある人のもとにて発句せよと有に挑え

おとゝきえてかつらかなき鳥の声　荊蟬

嗅ちらする寵明けりやおとゝきゝて　落梧

好風臭き葉えらう川や郭公　一髪

三歩ほとと跡のとゝしやほとゝぎす　同

一 淀にて

おとゝきえて十日おそきと報示ハ　風泉

嬉しさや葉のらぬ先のほとゝぎす　岐阜 杏雨

あふれしや今朝く鳴おとゝきゝて　傘下

くもりてや力かましき郭公　同

馬と馬よきつるあひろかゝきにし　鈍可

こゝ自あらの月とのこれると吟せられしに

おりきさおとさ人の暇ほとゝきすを　大津 智月

こゝらとるとかゝはきかふり郭公　李桃

うつりの又き表のふるほとゝきすを　市山

月三十句

かるくと笹のくれ行月夜かな　十二歳 梅舌

それうしや朝見える中のひかりかな　湍水

月ひと川おもひかりの今宵かな　一雪

西の月ときとなかしの夜あかり　越人

けうときも少揺むく有秋かな　昌碧

気はかりの宵いさいしや月の影　津島 市柳

きうけふほめて詠る月夜かな　一髪

ところでえとも月のかゝに　長虹

咲まて砚抱て月見の邪　任他

一つ金やいるのいとえる冬の月　亀洞

名月を枕ひるきもかふらり　越人

名月やしふ十二き有暇のうち　文鱗

名月やくいつきたてゝ浪の音　品碧

めいけつやけふりはひゆく水の上　傘下

名月や鶏の音と犬のこゑ　二水

ゑつりのたをとえて人の月見かな　野水

名月のわいそうそう

せつゝしと月をながむる日は木も旅にし　荷兮

いの月のとあとゝ忘れて急也　同

名月や海もおもはず山も見ず　去来

名月は下戸と上戸の咄まで　胡及

めのなかをありきてたらぬ旅の秋　鈴雪

宵あとし棒はさびしや月の影　一髪

十三夜

新ふて秋さらぬ極える月夜かな　杉風

朔日

暮いくの月の動かれし海の果　荷兮

二日

見る人もさしおく月の夕かな　同

三日

何ごとのみたてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜あんどんけしてしばしみむ　卜枝

五日

何となくさえてさそふや宵の月　伊豫 一泉

六日

淀河のおぼろやかねの月のそら　岡寄 鶴声

七日

能かほにふかれて帰る月夜かな　岐阜 一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角

いさゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落てよるれく夜の哉　京 塵交

かさなりや雪のある山只の山　加生

車道雪なき冬の朝かな　加賀 小春

はつ雪をとてうる顔を洗ひけり　越人

はつゆきや戸明ぬ留主の庵かな　是幸

あれのけのふらぬや雪の一ッ小　杉芳

くらき松に物語んかり雪の暇　二水

雪踏てくる庵にたちひる雀の那　鳥仙

秋の雪おもさぬやうに小枝わらん　岐阜 除風

雪のりや川邪をのりとはなくとも　鷺汀

初雪やおしかぶさる手紙の筆　傘下

雪の江の大舟よりハ小舟かな　芳川

雪の朝から鮭わくる聲高し　冬文

雪の夜の能さやうしや鷺の聲　桂夕

ちらちらや淡雪かゝる酒強飯　荷兮

さく川水や舩の[illegible]にも籬まで　路通

はつ雪や雪の光にあり所　野水

舟の字ていくつの[illegible]雪　芳川

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

あれへのあたらしらしき花の春　釋 古梵

かゝるや凡千年のはるく縄　風鈴軒

松かさり伊勢か家買人は誰　其角

うたの名連歌にあられかし音　文鱗

月雪のためにもしたし門の松　去来

かざり木にならで年ふる柏かな　一晶

元旦や何となくはあさかすみ　路通

元日は[illegible]よりまさる心哉　加賀 一笑

萬国の梅のさかりむかへに　大垣 如行

ふる河にこぼれて年の若　岐阜 落梧

若水をとうあたてかくや雪の袖　亀洞

伊勢浦や御木引休む今朝の春　同

こよみの名をとりて[illegible]宿の梅　犬山 昌碧

去年の春ちいさかりしが芽に[illegible]　元廣

小柏子栗やひろくむまつのうち　舟泉

よし男千秋事となりへけつて　同

山里にうらの[illegible]る竈かな　重五

松かざし川るはるく年とりて　釣雪

月花の初て琵琶のかな　同

連くるて子に[illegible]せう万歳楽　一井

うち向もちゝる沖の[illegible]かな　胡及

えみかえしこゝや新玉の年の海　長虹

今朝よりは縄もしかとく柳かな　荒弾

ゆふ浪やふるいの面っけのなからん　同

書初や舟の道のうんふく川　湍水

京

佛より花てらへときこのたの春　と乞

踊の姿やうしの目さいてのなからん　朴什

うきさやふとたうえひ見ずなき袖　冬文

正月の炎のうしらや飛鳥もら　傘下

みくの春寂しうくうる閑の聲　冬松

あひしふ松れさ門ともりしろや　柳風

大勝ちき去年の花さきふれ白のれ　防川

鶯の声まのき年をかてこ　昌勝

傘す萬葉うるらんり之方棚　夕道

神まつる松のきふちきるゝさの春　梅旨

さてくえむ露やうつる大ろみ　野水

喉をきもしめやどうやつら　同

古川きのめてらさ名あり覚笑く　越人

初鶯や浜名の橋も今のさま　同

吉川やよしふゝの葉きし　荷兮

若蔵のやどを清くて旦ふ声　同

是のとしやはりの花の初春の花　同

僧

我は春目かどに立る松夜かな　般齋

我等式が宿にも来るや今朝の春　貞室

初春

若菜つむ跡は木をわる畑かな　越人

精出して摘ともみえぬ若菜かな　野水

津島

七くさをたゝきたがりて泣子かな　俊似

加賀

如抱く轉く川あとのその水の若　小春

側濡て袂のおもき若菜かな　鷹羅

岐阜

袖あらきともせしてなりぬ若菜かな　素秋

石ばしくつかれて梅わしまいり　玄察

曙のまくれふかくの梅の花　鷗歩

うきのたものの事ふりあらず　越人

藪をあさわかれん梅の花　落梧

梅わろくあくうえ白き咲かれ　一髪

花よわき梅の前には頼母しき　冬松

みのむしとしれつる宿のさびしさに　蕉笠

細代民部の息に逢て

梅の木になほやどり木や梅の花　芭蕉

うぐひすの鳴そこなふる嵐かな　長良 若風

鶯の鳴や餌ひろふ片手にも　去来

明ぼのや鶯とまるちの細縁　伊賀 一桐

鶯にちひさき藪を捨られし　津島 一笑

うぐひすの声に脱たる頭巾かな　同 市柳

鶯にわするゝをなくや新屋敷　夢々

うぐひすに子の段を降て行くかな　梅舌

行ともなむかしの川の鶯の聲　野水

折〲に経のうらくしぬ鶯か　壺文

行人の墓をもなきぬのきはに　冬文

かれしばやまだかげろふの一二寸　芭蕉

うまれんとや色の眼のまろ〲と　傘下

あふ心のふくるゝとまふ滞るかな　路通

春座題
さし木

挿木をと待るつらさやかれく枝　荷兮

つく〲と見のめさましさめまゝに　舟泉

接木

つぎ穂とのこしかねる綾小　傘下

椿

暁の釣瓶にあがる椿かな　荷兮

同

藪深く蝶気のつかぬ椿かな　卜枝

春雨

ぬる宿かいゝ世の暮一かたよりの礼　湍水

同

春の雨弟どもを呼てこよ　鼡弾

白尾鷹

すゞふさの尾につけゐる白尾かな　野水

蝶の羽のまきあげつる志川くゝ　奇生

さ胸にうしろえてくるあさ露に　十一歳 亀助

ちく〲と和子拾ひつく〲し　舟泉

そこ〲と摘やつまずや土筆　其角

すく〲と案山子のまくら土筆　蕉笠

土橋やよこにはえたるつくつくし　塩車

川舟やよとのうつくつむつくし　冬文

つくつくし頭巾にたまるひとつかな　青江

蘭亭の主人池に鵞をあそばせられしハ
筆意有ゆへなり

池に鵞なし假名書習ふ柳陰　素堂

風のふく方を後やあをき柳かな　野水

何ことも なしと過行柳かな　越人

はし杭にあたる色おもしろし　一笑

たまのりもやめてさはぐる柳かな　小春

あをのれて柳も風にうつりけり　一笑

とりつきて花もちらする柳かな　昌碧

さしきせし髪のゆりまぬ柳かな　杏雨

えしらて堀に影のうくやなぎかな　此橋

ふく風に小竿のさきむしく柳かな　杏雨

吹風に麾のことよもるわかれよな　松芳

いせふうぬ日ハ中々の柳かな　校遊

ゆるしきに舷陰とまらぬ柳かな　荷兮

蝙蝠にかくるゝ月のやなぎかな　同

まつはりておもて車かな　素秋

川いとふ隠れ住身ハ四ツの柳かな　鴎歩

菊の名ハ忘てのちも植かへり　生林

仲春

麦の葉に菜のはなかゝる嵐かな　不悔

菜の花や杉菜のあたまのにぬくに　長虹

なの花の座敷にうつる日影かな　傘下

菜の花の盛りに鳩なつのめぐ　清洞

うごくとも見えで畑うつ麓かな　去来

万歳を仕舞うてうつる麦田かな　昌碧

つきまてはすくへらん桜かな　越人

庭くさにつまだちしたるさくらかな　笑艸

とりつくハ篁年ほどしのたるか　除風

まのくさはとらぬ桜かな　一橋

うしろより見られぬ岨のさくらかな　冬松

まつくらに山やくぬきのさくらかな　一髪

春風にちのゝふるゝ雪柳かな　野水

あふのきに落てころしゆく人のさへつりに　除風

ちるはなにつゝきあはしる雉子かな　一雪

けふはかり輪縄解てやる雉子かな　塩車

まとひつく芥あくる雉の聲　山崎 宗鑑

鳴さくらいつあはぬこのもかはに　露拾

あらそひをせつうしたふ雉子かな　越人

いくたひか背とる岸のほそ川に　去来

花ゆゑにさひしくおもく雉のこゑ　落梧

不図とひて後に居あかる雉かな　津嶋 松下

ゆふやけ撰畑にいるのきかな　一井

まつ蝶を兒の見出てわすれかな　柳風

梭桐の葉にとまりてねる胡蝶かな　梅餌

かやむしろ中とひのねるこてふかな　炊玉

この頃はかやつりなとすての胡蝶　百歳

暮春

何の気もなしつくる土筆の薹かな　忠知

ねふらしとてるふ人まつらぬきそふ夏　荷兮

ゆうかくの花さる跡はさくみそに　野水

谷にたつ日のあらし洞の菫かな　舟泉

草刈て菫選出す童かな　鴎歩

わら嫁のとまりはくるあさみかな　燭遊

麦畑の人見るはるの堤かな　杜国

すけ山や澤の身せりつむ所　大坂 或之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉

松明にや山吹うすし夜の色　野水

山吹とてふのまきれぬあらしかな　卜枝

一重かと山吹のそく垣ねかな　岐阜 撰雪

とりつきて山吹のそくいはほかな　同 蓬雨

あかつきや藥かな　去来

古巣の巣の土ぬりかへる燕かな　俊似

いまきるといそぬきこの燕かな　長之

燕の巣を覗き雀かな　長虹

笑顔に立てをされる燕かな　荒蟬

友減て鳴かひなや秋の雁　旦藁

角避て出るも見ゆる小雁かな　蕉笠

なからの清きに歌よみの浦の塩千かな　越人

祝ひ子と同じ飲みや桃の酒　傘下

人まつむねと陸との汐干に　三輪 支重

山まゆに花さくかゝる躑躅に　荷兮

讃ねやなかりて志からき茶の花　兼正

舟出ふ茶のちるけぬ鴉ちりの花　亀洞

ゆきとりや清撞鐘とゞく紙ぬあり　卜枝

ゆきとりや沙とえ氷ぬよゝる音　野水

ゆきのあさ濱のうを沫しらり　同

初夏

こ総もこんや白きは物に見ゆる　路通

更衣襟もをらずやたらしなく　傘下

ころもへの一刀かさしてみたきかな　釋 胤彈

貞拍老人のもちたまひし何がしの香をとめるのもちなけれ文鎮ふ中ゝる文鎮から紙ふうるをとまる香の紙裁人ふ物きうるを忘れなくなるゝ葉の法文鎮ふ中つるしる

髭に焼香もあるべしころもがへ　荷兮

多年たとくし一つ葉のひと川に　芭蕉

光も川ハとゝぬるらんうきつたき　一井

桜のは紙いつも見ゆる若葉に　越人

切らふの若葉とこれハはくるれ　岐阜 不文

若葉のうち古ふなるみのみ木に　同 藤蘿

やさしもれくるの木くのうら葉に　亀洞

ひらくと若葉ふとまる胡蝶に　竹洞

ゆあひして若葉ふゆく夕かな　鈍可

まけ山や戸の紙沢打木　夢々

よし虫小川の捿とらく麦一穂　玄察

枯色て麦もつのりえる夏野に　土林

麦のほて桑の木をうのはりしさ　作者不知

むさゝうらふたちうけ里の葵か那　鈍可

きゝ苗つふふなる稲や妹の嵐いろ　嵐蘭

まつ花ろくあふ稲さけしのつゝみ　落梧

けし散くあふ葉とえる夕かな　岐阜 李桃

大粒れるかゝへし芥子の花　東巡

咲られ見えて捨られぬ芥子の花　吉次

深川の庵にて

庵の松をしくしくぬれぬおもひかな　嵐雪

ゆかしさの色ハわかれ涙かはてる　野水

仲夏

宵の間ハ茜ふくらむわくらハに　櫻井 元輔

刈草の香ふ匂ふ見ゆる程たちかれ　一髪

窓ふくく陰子を生のかる蛍かな　不交

蛍さよふくゝき人喰蛍かな　風笛

乃細く追ふ先の沢のわくるかな　青江

香の秋ハ見えつ折蛍かな　含咕

くさうもの袖より出るわくるかな　卜枝

み路く濡るゝ袖の唯くるかな　鷗歩

ちらえて葎室とちふられけるに

こゝらうしのそくあやめの新溜かな　秋芳

坂のぬれて梅の一本の花りちても　小春

かなり大小葉不せたくあつふけり　杏雨

雨の暮れ傘のくるりふ吹坂の秋　二水

数の瘦て澄のうくふとまりけり　一笑

葉の花とりけける蟹の秋　胡及

汐引く葉の花も見むかさか　児竹

足伸くて姫百合のかなもさ蓮かな　此描

竹の子ふ折姥さけくまりけり　長虹

筆の時より志るしうの竹　去来

少き末くらうて中たるにあ鶴かな　野水

み月る小荷きたする汀の秋　大津 一瓢

この法ハ小栓にあまりぬみ月る　尚白

あ月雨ハ傘にあまれきまる庵に　亀洞

破笠にて

おかしうさかしさかりける蛸淋か　貞室

拾なかしにふく

おもしろうて中うてかなしき鵜舟かな　芭蕉

おなしく

鵜のほらふ海うち泳く蟆あり　荷兮

同

ひあかくて鵜をはうしん鵜網かな　越人

先の子の鵜をかすめなる鵜舟かな　大津 淳児

十一

曲江ふ海のえんえぬうらるまゐかな　梅餌

鴨の巣の見えたりあるはかくれたり　路通

杜若の陰をかくるゝ夏野かな　卜枝

虹の根にこの汐中の櫂ふむ　鈍可

蒲の花や泥によごるゝ宵の雨　同

揺るゝや荷葉書人をうらむらん　越人

冷しや灯のこ涼夏のあさ　藤蘿

夏の夜やさきみのふ夜たる里　旦藁

庵の留守に

きぬたうつ音の夏の暮　其角

夕顔や秋はいろいろの瓢かな　芭蕉

ゆふがほの花の白ゝぬめく　野水

夕かほは蛇のゆるえのくるさかな　偕雪

山伏もて夕かほみゆるのれんかな　津島 市柳

名は夕かほに紙て　長虹

暮夏

樋をもとむ蝉のこゑ　昌碧

ゆふかたの暑けふさくはかり　野水

夕立に干傘ぬらす炭焼かな　傘下

なくしてに楼やらぬ床涼に　玄旨法印

涼しさよ白雨ながら入日影　去来

落付て涼しや宿のまどりに　荷兮

いさ座の跡あけしぬくかりに　同

おもふ夜の人にまたゝ夕涼み　鳴海 如風

飛石の石流や茶の木ぬみ　津島 俊似

涼しさや楼の下ゆくみの音　今

枇杷のちの涼し舟　卜枝

ゆふぐれもわゝれてかゝる川わかな　未学

吹まててあの舟　岐阜 秀正

連ぬむりやさといわすとも　松坂 晨風

笠を見てみれば蓮に　古梵

河骨にその　芙水

松の古葉に　長虹

汐干の沖の涼みに　俊似

連あたる錦の清水　文瀾

川ぞいの　潦月

かさならハ凌霄花でも持たせけり　尚白

雲の峯めぐりて外は...　一髪

更ぬるや蚊屋をつらぬく花の...　卜枝

麻の葉に借りし... の蹄　（岐阜）李晨

狗猪も...に付くる名なるべし　越人

綿の花たまたま蘭に似たるかな　素堂

初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風　越人

撫の葉やちる川かつん秋の風　圓解

松嶋雲居の寺にて

一葉ふる音のしづかさ聞りけり　仙化

うごかるの...秋の夕ぐれ　（津島）方生

男くさき羽織を星の手向かな　杏雨

わかの母ハ涕をしたむさえりかな　芭蕉

蘇鉄や...のまくのしらくさ　文鱗

あさがほの白きハ露もえぬせ　荷兮

子をと守るものは何の白みなりけり

おく露をとるのみ…やわれくらふまで　同

隠れるおくのわ竹にうつし秋の…　鴎歩

あさがほやひくくのもとに咲る日　胡及

草ふかき中の…やふる雲の音　荊彈

秋風やしらきの弓に弦はらん　去来

蜩や道の…よりか狗か…の那　昌長

まつむしハいさゝか縁の…　鵞汀

さりとてハ鳩をきらふて鳴くとかや　一髪

…　素秋

あの雲ハ稲妻を待たよりかな　芭蕉

いなづまやきのふハ東けふハ西　其角

ちまち毛てかなわらしや萩の花　舟泉

ひよろひよろと尚露けしや女郎花　芭蕉

桐つくるもしあさがほの葡萄かな　作者不知

草ちるくからぬ花ハ花の色…　（伏見）任口

かへされて泉つむなる露かな　荷兮

ゆく人や堀ぬきらまらんむらむ露　桐及

宗祇法師のことばによりて

名もしらぬ小草花さく野菊かな　素堂

としくのうち折ふちるさ蔦の葉　俊似

仲秋

加賀衆ふ馬のとまりうる秋の雪　芭蕉

つくつくと繪をみる秋の扇かな　加賀 小春

呑川やそよく秋の螢　津島 益音

石切の音とする蜂のこゑ　傘下

芥のねや蟷螂いるあきられ　卜枝

粟の穂ふ人の見えるゆふべ小　一髪

田と畑とひろげて見るむ雲井ふ　伊勢 一泉

稲妻ふうれたるとあへる酒の燗　重五

山猫ヶ鹿驚つくろい笑ひ居り　其角

老ぬる人と物のひてゐる稲妻ふ　東順

藪の中ふ稲妻しるき立枝ふ　林斧

ところへれく地ふもふ蔦の色紅り　越水

かうあらそへる秋の稲妻かな　宗和

素堂へまかりて

秋の世ほ我なり秋とおもひけり　かゞ 北枝

きぬたうちて我ふきかせよ坊か妻　芭蕉

いそかしや野分の空の夜這星　かゞ 一笑

暮秋

きくの香に酒る人や紫帽子　其角

くゝふなりて菜畑ちりとふいなり　二水

かなくりて葛さく霧の垣ねに　伊勢 千岡

淋しさハ橿の実落る住ゐかな　濃州 芦夕

秋の暮ものゝ寸ちりや梅もどき　加生

芦の穂やまねく哀よりちる泪　路通

初冬

あらつちのそれしとくゆる時雨かな　湖春

京なる人にや米しける

一夜きて三井寺うたへ初しぐれ　尚白

も川しぐれ何おかし出すこの夕　端水

万句興行に

えきりの童ゑ人やどりの時雨かな　荷兮

人を待つる日より

今朝ハ稲宿たうつるしぐれかな　落梧

猶そ山の下緑のこゝすゑを枕かれ　炊玉

さしもたく善光る時雨かな　傘下

こゝろふに二日の月のちきちるか　荷兮

一葉川く柿の葉にみなりかゝり　一髪

このはらく酔て淋しさ囲炉裏かな　同

枇杷の花人のうきをぬく木陰の夜　同

茶の花ハものゝついてに見ゆるかな　李晨

梨の花しぐれにぬれて猶淋し　野水

暮草の川かるゝやこの下荒　昌碧

書まくらて青蕪にありし庵かな　同

のゝしりや書まく代のこゝろもとの　一井

うちものゝとゝみてあかる巨燵かな　落梧

石臼の破てきつのしやはせの花　胡及

まくらもとく比をきつの兄ぬかな　文鱗

冴くらしき泊船にのる蕪の花　卜枝

冬ぬる風の鉢をぬきぬ門かな　洞雪

蓮池のうちちひ見ゆる枯葉かな　一髪

霜きえて石けつまりく枯野かな　松芳

こがらしに吹とられたり霜の巾　杏雨

霜枯の跡にひきさる蕪の葉　蕉笠

寒月

焼とおく寝なく月を面白き　野水

あさ漬の大根あらふ月夜かな　俊似

仲冬

おろしおく笈にかかれる霰かな　津島 勝吉

ちりちりとつまでたたくる霰かな　同 重治

撞よする馬糞にましるあられかな　林斧

柴の戸とほしくつふやむ霙かな　杏雨

いくたびも雪をおらせるあしまかな　宗之

霜の朝せんだんの実のこぼれけり　杜国

みかんの茶の葉ふみくるあかな　勝吉

冷き池氷のくさり跡のとけ　俊似

つらつらと川辺のさきの薦かな　除風

すがなく何ともなしに寒さかな　夜舟

兼題雪舟

諸ともに雪舟おろして滑りかな　荊弾

ぬりつけて雪舟にくるみあられかな　荷兮

松をさびて雪舟に乗るよめかな　長虹

ころびより雪舟川の乗の中　一井

雪舟引や休むかまへにこぎておる　亀洞

つまさきのくもるとるもののけぶりかな　倉咕

まろ海や胴白黒鴨来ぬしら　白炭ノ 忠知

舟ふかく火ふなまへる川るさかな　亀洞

朝鮮とみえさやあるもんなんだる　村俊

井と掘る老い六月寒く薪焚く

とととゐみず裸がなかり

汗出して夜に寒む寒むかな　冬松

海鼠腸の壺埋みたる水寒みかな　利重

炭竈の穴ふさぐやら薦かかり　亀洞

膝節をつつえてみる寒さかな　塩車

火とぼして幾日になりぬ冬椿　加賀 一笑

いりこけし庭起きてのさき　亀洞

みの虫の待ちよりそふん此頃ら　芭蕉

歳暮

餅つきや内にもゐずに湯かえひ　李下

五器たくよめぬ夜のあり年の暮　尚白

かちえの後ははやけくちなくし　野水

まつとくく備つくるのる菜畑かな　亀洞

煤はらひ梅にさけゝる瓢この邪　一髪

木曽の痩もこけてくる人のいそけり

とて杼の実ひろひあつむる年の暮

まてうしなひそかさうりやせんとて

としわすれ杼の實一川ころくと　荷兮

門松をうりて蛤一荷ひ　内習

田作りに鼠追ふ夜の寒さかな　亀洞

雑

年中行事内十二句　荷兮

供二磨蘖白散一

いとけなや屠蘇なめ初る人次第

春日祭

としてふる居の藤の咲わたるかな

石清水臨時祭

皆音をとめてのふりさけさくらかな

灌佛

うまれ日やつゝみにそうて佛達

端午

おもしろく葵付たる髪落し

施米

うちあくくれてそはてはそて虫臭き

乞巧奠

三つ葉やのり七夕まつて覚えよき

駒迎

爪髪も旅のよそひや駒迎の人

撰虫

菜の葉やしそのとれるはりくさを

十月更衣

むしきの夜のつよとこの色り也

五節

舞姫に青らひ袖をぬらしけり

追儺

おもひ出てや脇にそらす鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計會　野水

春風春水一時来
おもし流のまじれる春の風
白片落梅浮澗水
ちる香の水に付くる梅白し
春来無伴閑遊少
花尊に留まるこのまほく隣かな
花下忘帰因美景
暮れなんとものゝいきさせよ花の下
留春春不留春帰人寂寞
ゆきゆらゝえのかの跡やかな
巖風吹袂衣不寒復不熱
綠脱は松の葉ゆふ川の流か
池晩蓮芳謝
蓮の香もゆるとまくる寒さかな
暑月貧家何處有客
来唯贈北窓風
涼しさを切めきふるりの窓
大底四時心總苦就中腸断是秋天
雲の脈まぎらしていかなし秋の空
夜来風雨後秋氣颯然新
秋のきたれて風よ人々かなし
遲々鐘鼓初長夜
耿々星河欲曙天
一志ひらりとまうてあらはれし
殘影燈閑墻斜光月穿牖
猶寐や流るゝ白ふくまもろの月
万物秋霜能壞色
白菊やまき霜てえらと秋の霜
十月江南天氣好
可憐冬景似春美
このしもふきらし見つくしはなし
寂寞深村夜殘雁雪中聞
鳴とをく出もとなむらや雪の原
白頭夜礼佛名經
佛名の礼すり持懐く白髪かな
禪閣の樫ひのうし浅ひかし

さそりふとしくく

鋸鏽目立　　舟泉

かや絶ふの夕日ふいらさつゝかな

付木突

わ月園ふ鏡ていなし人の家

鉤瓶繩打

かゝるさや酒のくらふよる秋の里

糊賣

あさ露のこほれうおちむつまそく

馬糞擼

ころらしの松の葉ふきとつまとて

李夫人　　越人

魂在何許香煙引到焚香處

かけろふの抱はられやのころもの丸

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺

花冠不整下堂來

さる風ふ笠ゆらゝゝる露哉ふ

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉

眉細長外人不見々應笑

もの数寄やむかしの夫の俤ならん

西施

宮中拾得蛾眉斧不獻吾

君是愛君

花ならうち捨ての（ゝ）らうて牡丹ふ

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

よの末ふもまされぬ色の御ふ

一日逢うをまうとゆ待ちく

卯

暮宿の野やも佛供たふ出ぬ　　釣雪

辰

杜若さん絶えの来る日ぞ那

巳

涅槃の暁ふつのふ扇ゟな

午
みあひよ菫手さゝと蹄そとを
未
蟬のこゑ武家の夕合ろふなり
申
水月尽や 鶴とまるかな作る
雨ふありく生とられ音船ふし
山獄
廉笠のよろとろ手あそれさよ 樹水
野鳥
鴫実のれもきりあしふ 児竹
里虫
枝ならゝむらりに鳴蛩濡れ 倉咕
海魚
扨とろと鰯川ると盆の月 仝
川魚
秋の昏鮎川くの次ふりふ 仝
牛馬四足是謂天落馬首

穿牛鼻是謂人
一方ハ極さく極の継木ふ 越人
蔵舟於壑藏山於澤謂之固矣
而夜半有力者負之而走
かちなから師走の市ふうるさえ
絶聖棄知大盗乃止
銃者夭
七夕と物のもてころれなきむうし
菊さへ滝なきかれハ花大ふ 挂夕
鈍者壽
鶯の声うりかゝまて百の葉 市山
藤房
ほとゝぎすとかむ时ときふかるさ 一井
師直
うつしく人つれらるゝ莉ふ船 長虹
一休
いろくのうちとりやけのき 喘水
法然

鳴海のつくろひするきぬたかな　亀洞

山岩

ゆく山は霧り減るくの岩の角　湍水

海岩

苔ながら浪にかくて土もかくるかや　仝

名所

八重の花も奥をみゆる龍田に　杜国

しら矢の背や武蔵の大江山　荷兮

かくれ家や桜も花より賑はしく　芭蕉

葉一把とるとも花のなる阿波に　湍水

須磨まではみえるあゆみる花の空　荷兮

琵琶橋眺望

香はる鬼嶽さへ霧ははせに　舎呫

関こえて爰も藤しろみさかかな　宗祇法師

美濃国関といふ所の山寺に
藤のさきたるを見て吟じ給ふとや

𠮷野出て布子賣たし更衣　杜国

まつ川や関にかれきし空の里　重五

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖の水まさりけり五月雨　去来

牛ながしる須のあくりの五月雨　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室

みやこしはゆかしの秋こそ見の喬　破笠

いさよひもまださらしなの郡かな　芭蕉

夕月や杖に水なる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらばけふの月もみよ　素堂

[illegible]　胡及

[illegible]　淵支

武蔵野やいくらの人のかくれ時雨　舟泉

湖を屋根から見せん村しぐれ　尚白

かしましや志まりあらそく神まつり　伊勢　随友

むさし野ゆとしもくらしての月あかり　洗悪

ちらりと世は嵐をのがや小松の奥　俊似

のちされの稲妻や小野の奥　津島　一笑

雪の木に二つら[illegible]川ふくれけり　湍水

よしの山も唯大雪の夕かな　野水

[illegible]の[illegible]を見に[illegible]　芭蕉

[illegible]の月や不破の小家の[illegible]　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

花の陰謡に似たる旅寝かな　仝

桜さく里を眠りて[illegible]　夕楓

日の入や舟に[illegible]の花　一髪

[illegible]や湊の[illegible]　荷兮

ひとつぬいで後に負ぬ衣がへ　芭蕉

ある人の餞別に

おくらるゝ[illegible]　除風

麦[illegible]食[illegible]宿も明安き　冬松

旅をこゝろ[illegible]に[illegible]旅寝[illegible]　昌碧

初月や[illegible]とおもふて市の家　松芳

夕[illegible]の人[illegible]一[illegible]　傘下

芭蕉子を送る

[illegible]別かな　釣雪

なき[illegible]て[illegible]秋の蝉　一井

秋風に[illegible]　野水

[illegible]秋の[illegible]　舟泉

[illegible]を[illegible]ぬを　鼠弾

[illegible]ひて　荷兮

文月の[illegible]二人[illegible]けるを

越人旅立[illegible]京より[illegible]を

[illegible]花[illegible]のうへ　野水

おくられつおくりつはては木曾の秋　芭蕉

[illegible]秋の[illegible]　路通

[illegible]其角[illegible]

[illegible]秋の山　荷兮

[illegible]　京　ち[illegible]

入日[illegible]　玄寮

[illegible]の[illegible]　一井

[illegible]

沃庵の墓とや墓の秋の雲　　文鱗

草枕犬も時雨るかよるの声　　芭蕉

旅なれぬ刀うゝてや村しくれ　　津島 常秀

鳴海にて芭蕉子に逢て

いく落葉それほど袖もほころびず　　荷兮

着ふるし羽織ハ綿の入りなから　　野水

其角にわかれしとき

あゝ何とひとりうつむく冬の宿　　荷兮

来歌てこゝろのまゝに雪の暮　　越人

うら枯のあらふしくゆくかるかな　　傘下

里人のわたり候かの橋の霜　　宗因

越人と吉田の駅にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき　　芭蕉

旅寝して見しや浮世の煤はらひ　　仝

述懐

艸庵を捨て出る時

きゆる時はおもひきえてもしもの夢　　路通

子と常守らく田とすゝ暮の秋　　快宜

余所の田の花踏入ぬを浮世かな　　落梧

高野にて

ちる花にたぶさはづかし奥の院　　杜国

桜さく〳〵あかりくるを含ふ　　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　　芭蕉

ちる花めさて我ゝよそのつゝじ　　荷兮

さらに入湯をからひたり一盤　　仝

一本のあさひもあまる作んに　　杏雨

肩衣ハ緞子にてかさせ光の夏　　杉風

細あそしや白髪にのつく麻木賃　　亀洞

九月十日素堂の亭にて

かくれ家やよめ菜の中に残る菊　　嵐雪

のこる菊に合るきくの語積に　　曉鵠

人のいたりとふらふく

浮世ごゝろあれこゝろまゝの霜の宿　　芭蕉

旧里の人に云つかはす

こゝろしの旅宿にやつる寒さかな　　杜國

鎌倉建長寺にまうでて

落葉うく身ハ清水にねぢれたふれ行　越人

いろ〳〵のかたよりちりてもどりけり

落葉を一筋ならず流れゆく

あれ〳〵る落葉ふみ分け焼香の塩さより　荷兮

古寺のそりたる出る塩かりけり

たらちねの噂有や冷ん後の月　嵐弾

榾の火に親子足さす侘寝かな　去来

目やかすみ耳やちかよる年の暮　西武

ふるさとや臍の緒に泣としの暮　芭蕉

行まくの年をおもふに年のくれ　除風

老となりをしてかぞへる人

けふ年や寂しさのとりて　越人

悼

妻の死にある人の京都に　伊勢 一有妻

きさらぎや余のとよりし時鳥　除風

物出く寒ゆかまつるおふ　長虹

虫干の日に付川枕にて　文瀾

虫干に小袖見てゐる女の那　冬文

さらけ出し娘の垢ハ苦になり　心棘

六宮粉黛無顔色

宵闇の稲妻消ゆや舟の影　長虹

一とくり人待のあるところに　尚白

さびしき折に

つまれしを薪やくれし雪の花　荷兮

老の那くる落葉にゆるつもりなれ　小春

妻の名のあらはれしばし非送り　越人

松の中ふくらむ桃のよかりけり　俊似

かのおかし巨燵と成くいのなかむ　舟泉

うらゝ秋に巨燵消えるいとられに　嵐蓑

山畑にかおかつや茗ひき　松芳

きぬしを袈裟にとて底のかな　冬松

おそろしやきぬしの須弥ら紀　昌碧

無常

末期ゝ

あさかほとむ念阿弥陀仏として夕に　守武

無常迅速

啼つくす川ひきのなきけしの島に　傘下

末期に

南無や空たゞ有明のほとゝぎす　嫂　元順

松坂の浮瓢といふ人の身まかり

けるに

橘の葉も新らしぬこそのうれけり　荷兮

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな　京　去来

何ゆ人あはれしながら秋まつ時やまた

何くれの小風とかたるちぎりかな　荷兮

世とともやく妻の身ゆかりかなし

みな月の桐のつぼみとおもひけし　野水

辞世

あさがほや灯籠一つに主コ剤

みなおもふ秋の頃

秋き顔のあつさぞ出て一躍り　落梧

一条野にて

柳くるや小町が骨のたとへさよ　釣雪

妻の追善に

ともかれへしこての里人それぞれのむ　自悦

李下が妻のみまかりしをいたみて

ねられずやかたへひえゆく北おろし　去来

ユ沐身まかりし後

その人の鼾さへなし秋の暮　其角

母におくれたる子の

わすれ子やひとり食くふ秋の暮　尚白

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの烹る音　芭蕉

稲をくみまかりける人を

あはれなるとものあはれさ小渕ふかり　嵐蘭

なき跡のうらや合歓のその日　加賀　小春

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

負くまる拝みかゝりし往生の像　嵐蘭

西行上人五百歳忌に

ま川きりと宵所法る櫻かな　荷兮

おなしく忌日に

連翹やそら臭日とをされるくと　胡及

うて首ふ嬉の菜ゝる二王ふ　松芳

本霧もく偲ふ宵ゝる西の花　杜國

法のさかりを扇ぐ熱く菜のゆる　冬松

花ふ酒僧とも侘ん塩さかな　其角

貞享つちのえ辰の歳弥生一日

東照宮の別當僧正の御房に慈恵

大師遷座執事法華八講の侍りし時

るかれハ聴聞にまゐりて序品の題を

散花の月はむゝのしえかしかな　越人

女房の穂ざしと覚えく法房にあく

嘻さ詠あり龍女成佛の所にまゐりし

ひあつて鼻かむ声の音たえて

ほろくと落るなみだや風ひの音　仝

鋭音の尾上のはくしら雪にかゝる　俊似

古寺やつるさぬのゝの壺草　一井

八景にて

法土の氣わかれむやよひふ　イヨ　千閑

咲かゝりふ花んなるの紅牡丹　一井

夏山や木陰つくの江湖莚　蕪葉

奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿子かな　芭蕉

灌佛のもと法清しきつゝのきる　尚白

高野にて

後のあふき花藏さくのゝの山に　一雪

詠ふまて庵一日の清水かな　加賀　一笑

十如是

おのつからなるれて通るしくらに　荷兮

即身即佛

夏陰の蔭は降いほんの佛かな　愚益

ほとゝきすや僧の組とる夏衣　鼠彈

おとろくや門あけてあつく桂隅鬼櫨　荷兮

折ふしの火をとろむしのかれまさる　探丸

石竜に旋風鬼の獅子のこころつまのみか　文里
魂にも舟より酒を手向けん　亀洞
たまはりたるふしある花乗ゟ　卜枝
桜の木のちりゝんてらん松の蘿　釣雪

平等施一切

桜狩りくらり人をとらへもすゝり　俊似
稲乗に大仏をうむ野中かな　荷兮
性越ろ門導頭くれをもち紙かな　卜枝

なる人四州の乗物ありとて旅にし
親とこ不会不圖てんと盛しく
承り屠とらしき手

屠くわぬ仏ありかくをあて　荷兮

ある寺の無行に

造てし法事の鼓の人てちらく　其角
まつらぬ物くき鐘をとのしや月の来　一井
弥の子に乗縄おちる法師かな　卜枝
人のいふにあまらくくちおもむらし　兮
ふまくさられ乞題て

衣やうくくう文をれしらう一附　乕弾

鎌倉の安國論寺にて

あふところの海や声ありおるらむ　越人

古寺の雪

明や伽藍くの雪見ましく　荷兮

同

寒きや二王の片腕　俊似
つらりかくくらへくれて空し雪仏　一井
わ嫁きる人のさいりや降なさき　文潤
千観かるわの世の一年のくれ　其角

藥王品七句

如寒者得火

かつかふらく絲嘆くり川ちまのおき　胡及

如裸者得衣

雪の日や浅將の袷の何まの袖

如商人得主

如子得母

双六のあそびよりくむつかしき

竹ふしてゝおもやとなつく清けりに

如渡得船

月のころ隅の桜はさらにあり

如病得醫

つらく時清の見付る山さくら

如暗得燈

秋の夜や出むかふ月にむかへさる

神祇

古寺や雪ふるこうて狛子也　釣雪

二月初午日詣

社さくらそや初午の日の梅　荷兮

赤んくと梅ちりかゝる鳥居かな　仝

鶯やしのあれくとゝ神の梅　亀洞

声も見さかしぬかつみ神の梅　昌碧

灯のうつろふりかりの中　釣雪

梅とかそうかいまとし梅の花　越人

鶯を見きはにまえさゝる神の梅　舟泉

月やしきゝるかゝれり梅の香　雨桐

門あけて梅の瑞籬かさのみとき　重五

絵するえる人の後のさくらかな　玄察

花に来て幣をのこりし社かな　鈍可

宮の後川うゝりえるさくらかな　李桃

わた洗の米折草の中の雉かな　好菓

ほくきさて花の中とある　玄察

宮居の灯をとくる火串かな　亀洞

破扇つゞり流れ清稜の水　末学

川ふまて癒さされに清稜かな　荷兮

うつゝし里のうす新く花樂かな　尚白

此月の見須いうらふいまかな　松芳

みさされや祢宜のさきる池菖　落梧

若宮奉納

きゝあふゝむかし花を来　利重

流の方と寐ふ花の水の花　野水

彼垂川花有の梢の花楽　昌碧

加くさの花や花盛か　村俊

橋杭や清稜のくる蝶かな　卜枝

祝

肩付はいくよになりぬ年忘　冬文

荷兮が四十の賀に

食まきも竹そめくふ見ゆる哉　重五

若の代やころくてられきむつかれ　越人

蓬莱は何にかの沖の石　傘下

いさゝらは海老のよふ杖つくらむ　亀洞

千代の秋にかゝれにまとしく来　同

去年しらぬ人おほかる人にやまなぶ

先祝へ梅を心の冬こもり　芭蕉

曠野集員外

維舟をおかしとみらむも此市中に
ひろく朝のすゝしさを見る翁東四明
れ麓に育く花のこゝろはこゝろをとゞむ
またいく佐川田喜六のよしの山あさ
なく／＼といひける事を実にうんずる文
麦喰し雁とおもへや野に
此句尾陽の野水の他にて芭蕉翁
の傍へしをとなり侍りしに此川辺
田野へ居をうつして実に此句を感ず
ひとしあまた育ちる人の中に虎の抱結
きしにこゝろ返されける人ありて独り
庵を営みしけるにし渺の故郷への
心ざしけむ花のごとし猿を帰て賓
にする三喜のなかくさといつるか賓の
字老杜のこゝろあると此居のりと
ましいく
麦とかや花にかへしあ居れし　素堂

これ文人のことゝつゝのりくるけらんし
と三人笑ひさ寒る吟しく

ことさしかさ法師のうけ流し　野水
橇の跡も志とろふさの末さく　荷兮
力の志川うたゝるねてし第ると　越人
門のゝ月偽闇のやさゝしれり　水
風の間利と袖秋のさ　兮
武士の鞭うつ川山にかと追し　人
志まりふつゝて淋の鳴る音　水
鷺より径より出る茶の人　兮
ゆふふられてかゝるむしろ筵　人
ものつり松の直さる花の端　水
千句いそれむ小山のてら　兮
暁さらし一室桜とも咲ばかり　人
あてこしかなとて夕月秋かな　水
秋の身は流の中うつる袖ならん　兮
秋と知れなく鷺人の妻　人
鳴るやら雨も東北渚の声　水

さむうなりくる利根の川舟　兮
きの日和てりくもりてかさ晨　人
気みのり行く羽織うち着て　水
ふらくときの市の隆いれさ　兮
流つさとや人の見る葬　人
柏木の御前の胸のつくくと　水
さゝやくとのことなさえつる　兮
月の夜より今は行過相撲　人
秋ふあるより里の酒と亭　水
哀しられ出稼ふある萱へて　兮
うれしくとものふ不破の関　人
かしこまる諫に涙こぼしもし　水
火箸の先にてくまのあつさよ　兮
うくきものゝさむさよとて人の　人
みせさとるて池の水かんとて　水
花さかり都もいまさ宜ら手　兮
持て来る茶加性の梨　人
墨染も見ゆる正月もえなれて　水

大根ささらゝ干にいとうし　兮

色淺や汲にさめさまを剃て置　亀洞

はるの舟なるに酒のわるさ見　荷兮

のどかしやおさき酌に花と解く　昌碧

百足の懼る菜くきけ置　野水

夕月のきみの白さとうち添れ　舟泉

おくせとの薄と捩り行きせ　釣雪

花のあかさとらい声くめ所なりや　筆

一鉢にしてうき世を古綿　亀洞

花の盛に二三本くる宮様の麻　荷兮

楽するはとおりに年蔵　昌碧

いろいろもあくてめらつに踏違　釣雪

湯殿まうみつとの木綿くり世　舟泉

涼しやと遠かつてくる川の端　野水

たからされしや行ほ月　荷兮

秋風に女車の髭をとく　亀洞

俵を寄多さ嵯峨の法輪　釣雪

附合にかのよくくぬ花の春　昌碧

八重山吹をもちならへし　野水

日のめてやかふ八百せん何としふ　舟泉

くやまゐに止めらぬに相楽　亀洞

向まく寒やる涼しの小舟で　荷兮

垢離かく人の茶わりの浜の番　昌碧

配所にく千奥の加減覚えて　釣雪

茶うくうくるおくのわくく　舟泉

むく起にかのひつきく赤喉り　野水

門をたくり萩すよんとむ　荷兮

いうらうて見性所の萩ふらし　亀洞

ねんの客くりされを高岡泥　釣雪

思ほとゆかるたものゆかの日　昌碧

ゆふを川秋の中くあゝのりな涼　野水

つゝくゆおわくく鳴る寮の宮　舟泉

花たれ古和紀安房の小湊　亀洞

夏の月やえるよに流の照はて　荷兮

桶のらつをへしまんけ置　昌碧

人なみに折花さして花に行　鈎雪
ついとつて肱に居る精進　野水
花しき鶴うきくさ麦の水　舟泉
柳のうらがうまきりの卯　松芳
夕がほを深袖にしてくるらん　冬文
行ふくさやうりうゐる月影　荷兮
秋草のおそとなく猶咲くれ　松芳
うかきとくる撲角力とて　舟泉
きつかの文かの捨らんと出る　荷兮
るまく砂の中のあれえし　冬文
火嵐の皮の衣とくる寒きて　舟泉
淡ん世しとうら淋し川く　松芳
高さより路を川して其家ふる　冬文
酒の半に膳もちて参川　荷兮
歩みと野礼も世に及ときき　松芳
よまて取紙の絵と先ふえる　舟泉
なかるもちふきくる花の貝　荷兮

舟のわたりや龍香井の宮　冬文
灯とりをかわひつてとるの風　舟泉
珠数くりつゝ捨息のうへ　松芳
陸辰に八島のあまのそぞろ寒　冬文
十日のきくのそしさるあり　荷兮
山里の秋めつらしと生鯔　松芳
片持買ふくう魚る中さむ　舟泉
ざぶくとあられとまる月の影　荷兮
馬のゆかれハるのいなかく　冬文
さひしさハ竃井の宿の夜の雨　舟泉
送ふまゝく蕎麦あまつとゆ　松芳
つくくと綿蕎麦のうてまく　冬文
あろうさふかく挽ぬ兩よむ　荷兮
けしの花とりあかハ百にあつり　松芳
味噌さる音の傍さとの　舟泉
茶屋の門さまくけり蘇分　荷兮
次すくふわくさに如なる　冬文
夫の形赤貝なさておろく兒　舟泉

〇貞外

散かゝる花の勝手もち　松芳
きはらきや瀑布を谷へおとしあて　冬文
さら面白き山くらの春　荷兮
ほとゝぎす待ぬ心の折もあり　荷兮
雨のわびしさに立てる戸の口　野水
引様し車ハ琵琶のかしきこえて　仝
あくさりおくれし人のりしのび　荷兮
月の秋膳のまへにさゝふ出てあり　仝
一荷にふかしや京のさくらも　野水
初あらしえらせの寮の坊主丸　水
菜畑ふむれとしよめそりの赤くなり　兮
土肥と夕くふのきさよせて　仝
京判おとしを神ぞものうき　水
通路のつゐたちとなけて逃る也　仝
六條ふあたとしなのりてきさ　兮
代まかりてしやくと流れひて　仝
浅き夢見り鐘一ふし　水

春の夜はきよひとろし鍾　仝
花咲ケりとんまそえなり　兮
天仙蓼ふ冷食あさし夫の萱　仝
うき身がけがけし看経の中　水
たゝく人あつて花摘もちたうかまし　仝
夕せもしきさ酒ついてやる　兮
狗のやゝ吠り渓流にハ甲斐　水
秋のあくしとり普浄瑠璃　兮
えんてくゝとよ吉ふり乞生身魂　水
八日の月のまきと入るまゝく　兮
山の端ふ松と桃とのにらみあふる　水
きほきたちくふくまる　兮
暑き日や腹のきたくの川流ひ　仝
太鼓たゝおり拍子ぬかるこの　水
こつくと疎まる木賃の艸枕　兮
気たてのよさと鑵ふおりくる　水
息やしきるぬ蔵ふして一二年　仝
庇とつまくさまのひのなりぬ　兮

三方の崩むかしに水のかゝる
供奉の菜麹を分へてきさらみ
陰しや小塩大原嵯峨の花
人わかれに中くはるの川岸

分　水　仝　筆

国しのわく宇にの是かさを
なくおかゝかりしろさ柄を作らそ
よれ国と宗理法師の句をもむし
如まつ文の秋の庇しらよわのわち
流りやもまとつくきぬ

同ふ柄をさしうらせよきさ国かれ
杉のとうそくりり家の秋の庇
そつくりを紙を垂くてくころゆらん
おのひつけかれきうのせふとさのそら
きかれかけらつくおきくてよのかり
住の君かり逢てみまくさある
うれろ虫と猫の子を逃るさるくふ
そしくくまてあそらうありくて

越人　傘下　仝　人　仝　筆　下

とこてやらまの節へをとて松さひ
まくおかくりけふ法ちらすかな
大勢の人ハ法華をうれされて
月の夕ゟ筍飯縄ゟ川
冷し柿よくよく柿は皆寝し
秋のかしきわ烟える宿
わかましふいつ近世と背くくさ
森あくく書る文字の句から戸
花のなふこらくゆゐる涙落つ
恵ゟのゝ鞠のこたくさまちうせ
うちも洗て浦の笘屋の塩千くよ
思へなびきて本れ住ゆる犬
砕さるのあれ除さき沈み虫や
たまさかつわる酉の子さかし
音合指古藻菅まわしおく
まく献立のされ右の小吉利
灯籠の池をわして押らくト
納をおくとせんきうつくまを笑

仝　人　仝　下　仝　人　仝　下　仝　人　仝　下　仝　人

ふく風にゑのころ草のちらちらと　人
半ハこゑ行薬やまの秋　下
むつくりと居たる霰の枕紙て　仝
人の請ふるてもちあまし　人
めきらしく成や道心を発ハ込　下
干せる魚のこ程ふ町中　人
おそくとも小諸の宿の昼時分　下
皆同音に申念仏　人
百万もくるひ所そ花の春　下
田楽きくれてさくら散しき　人

深川の秋

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しひならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕くれ　越人
瓢箪の大きさ五石ばかり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝
醫のおほきこそ目わづらはしけれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足軽ちかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
風ひきたまふ声のうつくし　越人
手もつかで昼の御膳もすべりぬ　芭蕉
[illegible]西行[illegible]　越人
月と花比良の高ねを北にして　芭蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
尺をはかりし麦のひきもり　蕉
家なくて服紗につゝむ一寸鏡　人
ものおもひゐる神子のものいひ　蕉
人去ていまだ御座の匂ひける　人
初瀬に籠る堂の片隅　蕉

はらくさき乱のあるゝ宮中より　人
坂本のけゝけ霰いてほそきく　蕉
あやしくも兆ふ姉の夕ならうそ　人
何はさいたつなるゝつむそ　蕉
ひつ月のうへの字ふて清からぬ　人
竹とゝく鈍りいねふりし　蕉
秋の田をからせぬ公事の長びきて　人
さいくなのゝ文字閑にふる　蕉
いろめしく亀庇の小菜屋　人
馳走する子の痩てかひなき　蕉
花の比談義参りもうらやまし　人
田にしをくふて腥きくち　蕉

翁に伴なはれて来る人のめづらしきに

落着に荷兮の文や天津雁　其角
三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に畳を引づりて　仝

銚子くるゝ茶いまふたつなる　角
竹うゑて縁にかけたる夏衣　仝
墨さえかりふさくあかつきの鐘　人
暇くるゝ涙まつくりとまりつく　仝
静なる花より籠とまとむる　角
空蝉の離魂の煩のおそろしき　仝
何とあかりける金二万両　人
いとをしき子を他人の名付けり　仝
やけどなをりてうつくしき顔　角
酒熟き耳につらくる嫁をとく　仝
奥をそてつくぬ月の江の舟　人
そめいろの富士は浅黄に秋の暮　仝
花とさしくる草の一瓶　角
饅頭とられしき神の色うり　仝
うき世につゞく死ぬ人を損　人
西王母東方朔も同じにいるそて　仝
よしや鸚鵡の舌のとゞかき　角
あらさかなやこにえさゝまらし花の春　仝

亦の紀とゝも宝に秋くのまゝん
やおかしき藤かしねかられすゝち参て
並つく毒を師竟ありたうし
夕稽宿の长さに膳のうかい
い〻川の巴を恭へ溝力
完いやふ塵らちえらい筆枕
ひらなくさりく係皆の八朔
帰月ふ不動摂ゝとなのゝえゝや
念忠法師ハ秋のゆくさの簗
夕まられまさらめき紙子秋忘
うきゝひくる突あけのまゝ
及そくふも食の結さる垣ゆひく
あのきてわりぬる士の園とり
京のまつまあるつき膾ゝとりし
むしろ家つさ與談の妻
嶽もらし新酒ハ人の解かれき　嵐雪
秋らて寒きし川も湯嫌　越人

人　仝　角　仝　人　仝　角　仝　人　仝　角　仝　人　仝　仝

丹の宿書と川ちくを中ふねて
承曲薬の草をけふゆく
まう緑あひて牧ふましらぬ里のる
川誠くさて蝶下のころち
癒癈臭の遠さかる徳叢の空き
唱ぬいもつく寸夜かたりやる
かゝくくるえなれしのくさ雪ふ
徐るさひよくはしいかる色らまかさ
さ紙よりけ沖あくまさる弘なき
引焼きらて一のくる浪人
荒綱と礁ふらてと一川税
盛りハ鬢そる宵の月のけ
まくく家の離て浴ねる女客
つまれの驚者のらしの染や
ちる花ふ月いらされとも世しし
よふこゑハ何をいふらん
初雪やことしのひくる桐株ま　野水

仝　雪　仝　人　仝　雪　仝　越　人　嵐　雪　人　越　雪　人

日のみしらさと香の細乾　落　拾
山川や精の陰ものとさうすらん　仝
継をとをてのうえるくのうさけ雪　水
おもつさま押合月ふ草郎川　野　仝
似ゝてくしも穂の荻　拾
川栽の岸ふさう枕ゆ秋の夜　落　水
ねふと痛める報のきくさあれ　拾
うらせことらり哀くうくつ〻様の下　水
きゝこさ寝よ比のうきこひ　拾
史ろ秋の湯に漬つうしとふ脱て　水
ところう起まて相伝の摺　拾
岩の松あちれ行ちうと人定くり　水
焼きるうちの心奇羨さ　拾
窓てさむすがのまの赤子も一文ふ　水
おさへ皆つく月のかゆろさ　拾
耳の蔦やよくても花の粧ふ良　水
見てめさせふりふの御年　拾
い川せらい学ぶぬはおくふ　仝

山伏注く人恙の係ふ利　水
くらうくと轉ぬけくる米車　拾
瀧行るゝく涼くゝうさゝ里　水
似ヲヲと注らん髪と梅如ひ　拾
まつうく袖もいさぬ浦枕なきさ　水
まいりしとかくるすふうれの世て　拾
かゝる斎中と餘孫かうてゆく　水
面やゝてきのちさむゝ面白や　拾
柳ちるこの空御例の薬道　水
新あくく月こそさきゝれお十間　仝
寂しき秋と如史居りまり　拾
亡をよくあつりめさるらふまし　水
悉もてまやもこいふしくの酒　仝
行くとの千魚積るゝ川注り　拾
誰よ花をまくえくくと子　仝
まるのくらうり涼こゝえさまし　水
ねふりこ注くとまま達明まり　拾

一里の炭賣ハ川をこゑて　一井
かたひの光れ飛ぶ家朝　航蝉
さらさらと浦や心をとり流ふらん　胡及
肩衣きて河も酒よきふ人　長虹
夕月の入きを早き境きて　嵐弾
たらしふ錦とつのこさむ秋　一井
里ふつく雁なりて二三日　長虹
文字ち妻ゆわれらまつく憂　胡及
問る紙ふり浸りみの言ふくれ　一井
着籠とくきらく切ほとく文　鼠弾
うらくと庵経なからふ湯とのうす　胡及
色ゆく秋半の鐵の雲鋤　長虹
なつてうよめりあひて今おもひ　鼠弾
給とてもこゑ女中なり　一井
浦風ふ経ふとまくる月添し　長虹
みるものしらさ泥浄の魂魄　胡及
若老のさしを狩てとる前の浪　一井
蒜くらふ香ふあをさこのつけり　嵐弾

はるのくれあつきくも暖かむ　胡及
紙子の綿の根りに蕉川く　長虹
ちれしきる間もさいく母を産んで　鼠弾
産後かとある奴風を掏きり　一井
あちきらふあつかわし松の枝　長虹
拜りうる人く乃奥　胡及
此手ふなりく灸の跡もあくき　一井
湯くりもせ侭ふつひ庵つる月　鼠弾
草ちくらく障子の陰ゆうて宇紀　胡及
ころさうるゑりふちわむ萩の露　長虹
汚のく禄入道の実のちるなけふ　鼠弾
ゑりうつる人のあしきる　一井
毒あり瓜一きれも吟あし　長虹
氏風あきらくきくる白酒　胡及
梅色さく踏ふあきき産の内　一井
ちるのあけくる玉さき丸　嵐弾
めくくとりくのちれぬも是　長虹
ふやられなといひれつくし　胡及

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らは常に
芭蕉の軒に行かよひ瓦の窓をひ
らき心の泉をくみしりて十あまり
なゝの文字の野風をたすけ更に家
軍せ霜凍てみなとせて阿ゝまさせて秋
されば二三子宿に侍りて火桶にしがみ寒
とおろさず庵をこれにはぼとけ宋人
の手亀まさせる薬もなしとや
されゝ新暑に燻のさむ風になるを見るに
おさく桜にかゝりつゝ金扇の松のたきよ
みな鏡とくとんよりまろいやうるゝのこゝと
まつ耳に入たらくもうつるりのめ露ぞのめ
そらの気に魂のまさりくるかにや又名
をとらはるの日の月とよりより秋
の月ふりくらうらかけつゝや吟行の席あり
て意にかなきれ二とせにかの月見ん是をひ
らきるに有色の経を何やうりをまうれ文

くぬぎ炭の節をそろへけるしるしと聞侍し
かく付侍るには詩の正義にいへる五則の
あれあるハやまとの哥にもかよひ侍り、
はらゑと例のほ句せられたるにもあたりぬ
竊にそよりや這ハつるゝひなからしひと日芭
蕉翁旅行の首途に深川の庵を訪之
て再會の期を契りぬ川此ふの集るに
なてかけ中庵の枕さくり火桶のすりゆかり
くぬぎ炭のふる寺ともいらましつくるの
ゑふ炭だはらといへるハ誹也けりと
りうちくるを小子ゆへありてしも窺いうる
にや比集をそらふ蝶と成にさくりこの心
有て是しも序書てよと云捨てゆかれ
ぬ今此書をとりかへし初めを書てふ前ちう
おはらひぬれハ夕り冷ちハ露をつかふる壇木
はめぐりしくかもと侍くむ

元禄七の夏閏五月初三の日　素龍書

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉
處々に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　仝
上のたよりにあがる米の値　芭蕉
宵の内はらはらとせし月の雲　仝
藪越はなすあきのさびしき　野坡
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　仝
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河原　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆のつらりと酔て花の陰　野坡
門で押るゝ壬生の念仏　芭蕉
東風々に糞のいきれを吹まはし　仝
たゞ居るまゝに肱わすれぬ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
縄手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　仝
魚に喰あくはまの雑炊　芭蕉
千鳥啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆる菓子盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外とちまくに聞ゆ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ころの宵の月　利牛
早稲も晩稲も相生に出る　野坡
泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれば昼のかねうつ　利牛
隣から節〳〵嫁を呼に来る　野坡
てうつくしくも誉るかはりに　嵐雪
黒谷のくちかふ聖護院　利牛
六百のかけを二度に乞なる　野坡
洞ぬきのいがの波ある岸の上　嵐雪
人のきらぬ松からむなり　利牛

新役の鞍とらせたる日ハくれて　野坡
坂の中なる芋を堀る月　嵐雪
漸と雨降やみてあさぎの空　利牛
雛れみしれ又軒のく　野坡
半公のならしき新ふ塗ぬりく　嵐雪
抱揚る子の小便をこぼれ　利牛
くろくろと河内の綿の淺黄屋　野坡
かくらうて着のせんたく　嵐雪
聟の来らく姫の世とハ出来たり　利牛
こしのうれい何と寝ても忍　野坡
金佛の細き御足をさすらん　嵐雪
此うへいのふるきとられよる　利牛
粟の穂ハ掛る風に吹倒まし　野坡
る場の喧嘩の跡ふきむ月　嵐雪
身をやつしく江戸て人になる　利牛
今ハ在庵のふちへかけそ　野坡
賣手のつかてふせる花紐　嵐雪
ひらりくと出きのふるぞ出し　利牛

穢倉の役きりせりうらるゝ　野坡
このごろ宗の芝をぬく細门　嵐雪
柚ゆる姥とちらりて花の陰　利牛
まくらいのこる正月の僻　野坡

空豆の花さきにけり麦の縁　孤屋
晝の水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつとのぞけバ酒の最中　利牛
寝処に誰もねぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶ秋風　孤屋
ウ
きり〳〵す薪の下より鳴出して　利牛
晩の仕事の工夫するなり　岱水
妹をよい所からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛

鰌汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出す　孤屋
このごろはどこやら花の静なる　利牛
うつし柳を今ふさしこそく　岱水
雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
不届な隣と中のわるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらす　利牛
泥うちのけそうふ出来し浜ちかふ　芭蕉
菜もよるまゝかみも忌ある　孤屋
茸のあつふきなんでねれは汗がひけ　利牛
客を送りて提る燭台　岱水
今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋
年貢すんだとやはらかにいふ　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕の照　利牛
名月のまに合せ度芋畑　芭蕉
すたすた言ふて荷ふ落鮎　孤屋

このごろは宿の通りもうすらいで　利牛
山の根際の雪かすかなり　岱水
よこ雲にそよそよ風の吹出して　孤屋
晦日のよるはそれもさくつる　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
余のくさなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛
各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの真白に咲　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に菜を干の納るよせ　野坡
るすに鶏さしてとらさくへあり　孤屋
筋かひに月の手まへの茄汁なくさし　利牛
柳を跡のつる檀まるるなやむ　野坡

ウ

ぢゞめくの中でより出れるはなあり　孤屋
坊主になれどやはり仁平次　利牛
松坂や矢川へもいるうらまかり　野坡
喚かる聟もつらき舅の従　孤屋
十二三弁の衣裳のおもくらい　利牛
本堂ゑんしる音もとゞろく　野坡
日のあたる方はあからむ竹の色　孤屋
只奇麗さりにきゝたる　利牛
どこに浦のゝらの絹をすりぬく　野坡
天気の桐に三日月の照　孤屋
生なから歩ふ思ひし涙　利牛
椋の実落る屋根くさるし　野坡
笋賣の戻り連立花ざかり　孤屋
御乳供くるの人のそゝつく　利牛
ほうくと二日灸のいほひ出　野坡
わろくあへの膳にこぼるゝ　孤屋
なの花と振くさまでも拙者い　利牛
聟殿の気もまふつかまて縁　野坡

渡しに西国武士の荷のつどひ　孤屋
尚きのへより今りて大草　利牛
切蟯の咎倒しくる棲くずれ　野坡
らそり納豆と仕込廣庭　孤屋
瘧日をまぎらかせとも待てゐる　利牛
茶でまけゝる下鉢の宰くさき　野坡
つぎあひの色を仰しかふ暁まつり　孤屋
とおりの裏のきたなき井の中　利牛
それの自様ふ貢来る古相　野坡
きいきの長のあまりころそい　孤屋
一ウ
ひつそりと盆はをてる淨去る　利牛
戸でかくくしお風呂の屋根　野坡
伐透も根と榾のまぎれあひて　孤屋
京いかにハあくらしき内　利牛
濱ともて宿の男の荷をとうへ　野坡
師走比丘尼の颯のさゝよ　孤屋
屏縁の間を年で買うへく　利牛
天満の状をまつさされたりも　野坡

廣袖をうへにひつぱる舩の者　孤屋
むく起ふして参る観音　利牛
燃さる薪を尻手に指くべて　野坡
十四両のふりまひしまる　孤屋
月花にかきあげ城の跡ばかり　利牛
二
弦打颪海へとる　楠　孤屋
機嫌能かひこは庭に起かゝり　野坡
小豆のちんの空静なり　利牛
孫嫁り晴る足を投出して　孤屋
猫の蹤うけを念入て見る　野坡
麦畑の替地に渡る榜示杭　利牛
賣手もなうて取次の筆　孤屋
物毎も子持になれはたくさんに　野坡
又は彦の古茶いらぬく　利牛
汲ま寺のふつゝにしれハ二合流　孤屋
さらはちんかく寂しくりうなま　野坡
藤蔓のこまゝの下相を除わし　利牛
一つくふりハ雛の雲僧　孤屋

跡さしに狐付ちきる船の月　野坡
なかれておとる裏の縁あそひ　利牛
めと縫て無理にかまる暁の夢　孤屋
又このみして炭焼たよりさく　野坡
かゝさはに中の巳のりとまつる　利牛
入来る人に味噌を出して　孤屋
まちつこのひに来錦給の静田川　野坡
此茶屋のえある宿の名つき　利牛
ほやくとえんとはなさずすきれ　孤屋
あ茶に縁ましる熱汁　野坡
茶の内川織て居る襟から　利牛
尻痛をあまる坐半もよく　孤屋
おちうるうく時の雨の声　野坡
入舟つゝく月の六月　利牛
拭ふくお上の家居ひくのちまる　孤屋
當てつのる詞このちかひ　野坡
冬 大かのあぐく不畑の砂のふくく　利牛
何年菩提しるぬ栃の木　孤屋

炭竈に手負の猪の倒けり　野坡
丸九十日湿をうれふる　利牛
投打もちらに一まくふめつくさし　孤屋
ふくなし葉越よろ傷ふ休る　野坡
里離れ成礼川のふらつまで　利牛
手まくらのものを嫁の継もと　孤屋
気ふのる朔日志すの精之巷　野坡
うんし果ぐる八ゞのちら　利牛
町寧ゝ仙甚也俵の口から　孤屋
備後う渺る土手ふある節　野坡
夕月ふ鬱若の名字とびかり　利牛
色こて戻る鯰のやまさ乳　孤屋
宝く兜と今年の風に旅ほか　野坡
わわや仕かのまおしぬおとゑ人　利牛
暑ヶ痛の珍ふ土用とうちきり　孤屋
樂月ふりて乞ゆる遠坂　野坡
臧ゞせぬ泥絡屋の世の疵さし　利牛
門建ても町の衣諸　孤屋
彼岸も一里の花の咲つゞく　野坡
三人ながらおもしろき春　執筆

春之部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
東雲やまの戸をたつるかど松　濁子
みちのくのけふ関越ん箱の海老　杉風
春や祝ふ丹波の鹿も帰とく　京 去来
刀さして供もつれたし今朝の春　膳所 正秀
いそがしき春を雀のかきえふま　大阪 洒堂
嗜稿や木曽のふかんの檜物　岱水
松かざり門跡坊主の手祝　沾圃
目下にも中の絹や年の閏　孤屋
初日影我茎立とつまれたや　利牛
長松が親の名で来る御慶かな　野坡

梅

梅一木つれ／＼草の姿かな　露沾

うめ咲や臼の挽木のよきまがり　曲翠

梅が香の筋に立よる初日哉　支考

窓のうちよりみえたるをかく

伊賀　梅ちるや糸の光の日の匂ひ　土芳

うめ咲て湯殿の崩れ直しけり　利牛

赤みその口を明けり梅の花　游力

みたふりし咲そろひたる梅の花　野坡

あの梅ハ娘もまかる家かな　杉風

をりのことしの七ふたさかれ花ぞく

ともえたる蕗に見へる蒜かな　其角

七草や粧ひしかけて切刻　野坡

うちはれて家根瓦に経つ鳥　仙杖

洛よりの文のはしに

朧月一足づゝもわかれかな　去来

大原や蝶の出て舞ふ朧月　僧　丈草

おほろ月まだこえぬ路中に　仙化

深川の舎

出笑や宿の柳も三ケ一　利牛

十五日立や睦月の古手賣　之道

猫の恋初手から啼て哀也　野坡

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすにほうと息する高ねかな　嵐雪

鶯より菜をしへんあつの文　其角

うぐひすのあらに就中寒さに　桃隣

鶯や門はたまたま豆腐売　野坡

鶯のあかりハ念を入にけり　利牛

柳

こねりもしつらくて植し柳かな　湖春

隣からこし方のあひた柳かな　素龍

あら人枝おさへてみる柳かな　野坡

せきれいの尾ハ見付る柳かな　一風

町中へ走るこむ宿の柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土くれに羅にちる也椿かな　孤屋

枝もろく代らぬ水を椿への艸　湖春
含みてく鶯のうつむ椿に　曲翠
振売のうちさめみきく花椿　嵐雪
あるほどの伊達も家老の赤椿　支考
はき掃除してから椿散にけり　野坂

花

うゑ野の花見にまかり侍りしに
人々幕打さはぎものゝ音小うたの声
さま〴〵なりける傍の松かげ
をたのみて

四つ五器のそろはぬ花見心哉　芭蕉
めづらしや内で花見のはつめしろ　杉風
うらやましと来ていふ人の留守居哉　文草

何かしの殿の
花見に侍りて

中下もそれ相応の花見かな　素龍
花守や白きかしらをつき合せ　去来
朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋

何とても云花見の宵のくさの月　荊口
たくの手もとをのへいそぐ花見哉　斜嶺
柿の木に登りたがる子や寺の井　北枝
牡丹餅をくひゝやれ花見とてこそ　湖春
あくなりし花に戒の桜かな　其角
花いよゝ思ふになくし家桜　嵐雪
山さくらちるや小川の水車　大津尼　智月
花繕も襲のつきざる花見哉　大阪　之道
詠海も花に珠数くるまぎれかな　祐甫
山さくら小川飛こす女かな　越前福井　普全
昆布とりや花や香のつく庫裡坊主　利牛
おちつきは実のまつせや桜のり　仝
おうつる桜てらくや葉所　孤屋
近まよくあちへ入りれくて花見哉　野坂
食の時みれなつまるや山さくら　仝

上巳

常陸とふ小川のほとりの汐干かな　沾徳
足よわの宿にかへりての桃の花　桃隣

このくさの神ハいつまでも秋の雛　其角

鬼の子に雛と居ゑまし雛かな　美濃 如行

日半路をてられて來るや桃の花　野坡

麻の種毎年蹈るゝ桃の花　利牛

藪垣や馬の鼻つくわらの芽　孤屋

青柳の泥にしだるゝ塩干かな　芭蕉

題しらず

蝶つかふ命からむ小麦かな　嵯峨田夫 為有

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏　芭蕉

菜のとうしの葉や二三本　子珊

はるもしとこみ羅門のつゝじかな　杉風

ちるのりや蝶のとびかふ風の末　伊賀 猿雖

宰相よきし花蕨の蕨かな　仙華

旅行をおくる

法度場の垣より内ハ菫の花　野坡

此集いまだ半ならず孤屋旅立す

なりなりに品川まで見送りて

あちらなる鳥居ハもとり行もありかし　野坡

梅さくらふくをもうり別れかな　利牛

夏部之発句

首夏

隠家の裏梅も明し衣かへ　嵐雪

衣かへ十日はやくや花の中　野坡

綿をぬく旅ねハせはし衣更　九節

岸よりやまきさきのくれや衣かへ　雪芝

花の跡さかりむかしの名残りかな　子珊

前垂の腰蓑白し衣かへ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

うの花の絶間たゝかん闇の門　去来

旅行

卯の花に芦毛の馬の夜明哉　許六

うの花に卯ありく花のうらの月　支考

題しらず

梓のみさやうら輝るめしかな　湖春

髭宗祇池に蓮ある心かな　素堂
うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

今まてハ二階に寐たりほとゝきす　桃隣
ほとゝきす一二の橋の夜明かな　其角
竹蛛と月の夜ふたりほとゝきす　嵐雪
あめふれて菊植る中のや郭公　杉風
桃竹の室小徑をしほとゝきす　芭蕉
まくやねや舟なりしやる子規　素龍
時ある鳴く風の音になる　利牛
子規顔の出されぬ格子かな　野坡

麦

柿寺に麦穂いやしや作かり　美濃 荊口
麦の穂と立ふくらむや嵯峨山　千川
麦秋の田植やおそき菜どきき　許六
鶏の塒を川端まて送りけり
刈こらし麦の匂ひや宿の内　利牛
はれし時り

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡
ひかしこころ也
浦風やむらかる蠅のはなれきハ　岱水

端午

ふりあしや傘に付たる小人形　其角
さうふ折てつゝもやきの風の色　大阪 洒堂
五日こそあたにまける方ゆかし　桃隣
文もなく口上もなし粽五把　嵐雪
みとのや八首の冑とこて甲を通　仙化
帷子のもとぬるき袷にも　素龍

夏旅

並松をみてやくたく町のあつさかな　臥高
柏葉に包みかのあつしこその手　斜嶺
二三番鶏もなきけり小川さらに　長崎 魯町
まけ山の力おちまりつきかな　猿雖
駿河路や花橘も茶の匂ひ　芭蕉

五月雨

此宿ハ縁田よりの扉かり

はらくれやどれもはりへわたる丸木橋　素龍

みな月の鯉や淀川大和川　抱麟

さみだれに小鮒をにぎる子供かな　野坡

みな月や鯵の中なる萍蓬　嵐蘭

このころは抱清より出てこしぬ

みじか夜や龍を枕しかのへ竿　岱水

涼

川中の根木によろこぶ涼みかな　芭蕉

月影によいよく高くや菜の花より　女 とめ

涼しさは塩にさかる竹の枝　長崎 卯七

月影と思ひてくらき涼み哉　採芝

涼風はきてくれて涼しみ絵の雲　智月

おもしろさはこぼれと酒がはり鬼かれ　備前 兀峯

涼しさや淀洲の人のはてしらず　去来

夕暮にちよこの水の流りけり　野坡

ありさまの陰にて涼む哉　素堂

蝉しらて

猫や寝ればのあつさかな　杉風

麻汁むくや瓜茄子しらぬまゝ　正秀

世の中や年貢畠のけしの花　里東

ふかがはしの(へ)てとくる茶筅かな　嵐雪

木曽路にて

やまぶきも巴も出る田植かな　許六

ほとゝぎすや身にしむく秋の新　智月

まくらや人にさそめぬ竹のかみ　北鯤

暁のめをはまきせよ蓮の花　乙州

あさもの風のふつつる大かな　丈艸

涼しく風の夕や夕葵　仙花

一しぐれ蝶とさらく花の上　楚舟

あつさのる蝶のゝ露も雲に　美濃 残香

猿の牙にかけるる茄子かな　嵯峨 為有

みな実待町のあつさの那　怒風

けふとさは蟹の栖や雲の峰　祐甫

一枝はさけのさ竹の花ごに　仙花

竹の子や児の名ゝきの花しきさ

さしのさき人僕の酒さたしむくと　嵐雪

かゝく戒めのかいく謡をうたふハ
ある人ハ是にとらへてあしくあしき
いつとなくしあるかきうとれ共て
あらしせられ冬まで汗をかきて
路く晒す身のつくあ川さき　利牛

いる人の別墅ハいさなも是ゟ白
未秋の梅のくりしきるのつく外の
一　ふくとかのらめ出しりく
ほきをねてわるくいふや萩見舞　野坡

穐之部

秋のあはれ入かはるの中ハ月と就て時候の序をそへて

名月

明月や兄弟ありてと忘ぬ折つよさ　湖春

名月や椽とりまはす黍の虚（カラ）　去来

家買てことし見初る月夜かな　荷兮

名月や雉咲紙て表の嬉　洒堂

松陰や生（イケ）松揚り江の月見　里来

しら浪の稲のかくさよふ家の月　利牛

あたら川木をきをし浚の月　其角

むさしの仲秋の月をしあて
見捨しも富士の不二荒波と

明月や不二みゆるかと駿河町　素龍

七夕

笹のそふ枕付てや星むかへ　其角

星合をかる人あるやかやの縁　孤屋

七夕やふりそりくる天の川　嵐雪

盂蘭盆

らうそくふつけりく新や玉まつり　洒堂

嬉るつきほらふ醉く盆の月　江及　李由

盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝皃

閑閑

朝がほや昼ハ錠おろす門の垣　芭蕉

朝顔や日傭出てり跡の垣　利合

ていうめうく朝顔まくる柳の木　湖春

秋虫

年よれハ声ハかるゝそきり〳〵す　大津 智月

啼やむハ人のさきれやきり〳〵す　丈艸

蟷螂ふみえて蔵するぬけからに　嵯峨 為有

うら〳〵や箸て返る猫のこゑ　孤屋

鹿

友鹿の啼を見かへる小鹿哉　車来

人のすさめぬよふかく

鹿のふむ跡や硯の躬恒形　煮能

旅行のとき

よそ鶏やきゝてふくる鹿の声　土芳

草花

宮城野の萩や夜の秋の花　桃隣

花すゝきさそふからやむら雀　野童

戻馬の萩や川こえて橋の端　猿雛

芦の穂や顔撫る婆かゝり　丈草

なにハ津にて

芦のほに箸うつかるや客の膳　去来

女中の茸狩ありけるに

茸狩や鼻のさきなる歌がるた　其角

園菊

菜畑おくしめる菊のかほりかな　杉風

継菊を見にはなして九日かな　桃隣

秋植物

柿のなる本を子どもの寄どころ　利牛

落栗や谷ふなかるゝ蟹の甲　祐甫

秋風や茄子の数のいろちりて　木白

茸干て宮ふとちらく椀の桃　孤屋

たうがらしの名を南蛮がらしといへるハ
これハ治世南ちんよりわたりしゆゑ
ならんや未詳かへつて天のたまもの
と八ツなりとしいへるハおのづからよそ
とゞめるべくのあらがへて付
あらぬ人しられぬさとりの各目
いふかうまれ付のふりくのあらも
天資自然の理さらく根次

うれの窓とうらうや苫舟にのせら
れて竹縁の之しのびく浮ありよて
の仕合ありとかきられいまうりそその
連雲こゝに出帝のつゝかつふ出つれ連
てやねのたら連二階のつま抱りし
のひかけとそのめるあとあやうく
こゝ待と朝白のそうれさあくひ
なりふられもくおかれさてたのくい
う川ら堤つり堤の手の浮らふらり
のしつゝ出そ浮んか橋の浮をうつす
みさうれとおうり不合萩葉のさき
ふとみ山されおかくふ中川と立数の
比那葉の色にたなとびと紫花乃
頂とろ佳くふふへとあり人小飛
まうとの陽さうりみちの佳そうの
小方らりこうね一面ふれく海の
まそくとれとらみのりしと千のを
せしらすなりとふるを切しあら

窓あかりあそあつすきのし日暮ちと
それ人くくと此の世をさりつゝるを
いよく去ると色見のむ窓てう浪
うつろふ世ゑ来くらゝ出でと小袖を
来つのうれ

石臼と深くしねさへ帝あし　野坡
能しらまて

お襟元あふぐや秋のうらすき　嵐雪
あの風呂の戸やある家子の身の程　丈草
甚ひらりよさ漆ぬの色ゆのれ　洒堂
秋のくれいよいよかるくなる身かな　荷兮
茸狩や茴(イッチ)蕈と呼は嬉し顔　利合
夕ぐれのけいハ鮎しる榎かな　文考
かる秋ハ風にうらみてあらかり　北枝
秋風に蝶やあふなき池のうへ　信 依々
庖丁の片袖くらし月の窓　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落てふし見　挑隣

冬枯の磯に今朝見るとさかのり　芭蕉

桜木や[illegible]そのうまへ　支梁

[illegible]のきれ竹や小春来　斜嶺

刈蕎麦の跡の霜ふむ[illegible]　桐實

凩の藪にとゞまる小家かな　残香

初霜や猫の毛も立臺所　楚舟

凩や[illegible]猫の面　八桑

南[illegible]山に詣て

木枯の根にすがりつく檜皮かな　挑隣

[illegible]月に[illegible]の藪[illegible]のさむさかな　游力

時雨

芋喰の[illegible]初時雨　荊口

[illegible]時雨の[illegible]　丈草

芭蕉翁[illegible]

[illegible]　斜嶺

[illegible]　許六

旅寝のころ

小夜しぐれとなりの臼は挽やみぬ　野坡

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉

[illegible]大根引　野坡

[illegible]雪の土大根　洒堂

[illegible]　野坡

人[illegible]　木峰

[illegible]　利牛

[illegible]の月　我眉

奥[illegible]の月　里来

右の二句は[illegible]

[illegible]

雪

[illegible]　野坡

初雪のみごとや馬の鼻ばしら　利牛

はつ雪や塀の崩れの蔦のかく　買山

雪の日に庵借さうて鶉鷸　依々

雪の日やあちこちかるうし柏　猿雖

冬の夜伽藍寺にて

枕の上の雪淋しなり杖の鴫　支考

朱の鉢や作りかくしたる雪の鶏　北枝

初雪やなんでる庭の消さむる　許六

炭売の横町さかる雪吹かな　湖夕

海山のなるかさる雪吹かな　乙州

江の舟や曲突にとまる雪の鷺　素龍

歎不知

かなしさの猶にふえたる枯野かな　羽黒 呂丸

寒菊や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉

禅門の革足袋おろす十夜かな　許六

炭焼の釜押とられ村うしき　智月

白炭のもろき白けや枕の箸　之道

榾の火やあかつき方の五六尺　文草

庚申やことに巨燵のいゝ客　残香

堆と堆の縁組すんで里神楽　其角

浜へ佳義やあまり波の音　仝

すゝはき

煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉

煤掃障子をあくゝい手代かな　万乎

煤つきや頬をさまる蔵の鍋に　野坡

山科のゑらずに勤師走かな　嵐雪

物もふやかましき年のあくるゆく　智月

歳暮

この年中文くはり一周しつ　杉風

年のまゝ名ぬ鮮入りあり冬の暮　李由

あまぎませて暮一羽ともしのれ　智月

猫つれてのけもくしきの年の暮　孤屋

年の暮いつもしらぬ俵の那　猿雖

芭蕉よりの文にふれのあり

いつもの年有しが其くりうふ　野坡

爪とくんやさしや年より　素龍

り年よ東へとかへしも吹ひとつ　湖春

俳諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れかね　其角

おくれて一羽海わたる鷹　孤屋

朝霧に日傭揃る貝吹て　仝

月のかくるゝ四扉の門　角

祖父が手の火桶も落すばかり也　孤屋

つたひ道には丸太ころばす　仝

下京は宇治の糞船さしつれて　其角

坊主の着たる蓑はとりしき　孤屋

足輕の子守して居る八つ下り　其角

息吹かへす霍乱の針　孤屋

田の畔に早苗把て投て置　其角

道者のはさむ編笠の節　孤屋

行燈の引出しさがす燧石　孤屋

新ふかの茎くらくねの月　其角

綟縄で鰹のきれはしぬくゝと　孤屋

居のかゝる花なかの頃〻　其角

年々の梅津桂の花もらひ　孤屋

むかしの子ありしのばせて置　其角

いさゝか銀なくさ金のつかひ道　仝

宵の緒のあくらしき内　孤屋

夜学のぶらふされてやれかゝり　其角

ひゑくと入るを小僧はやける　孤屋

年の豆蜜柑の核も落ちりく　其角

帯ときながら水風呂をまつ　孤屋

君ならハこゝを退次男の家をかり　其角

褌と麻との片荷つる籠　孤屋

辛崎へ雀のこもる秋の暮　其角

北より冷る月の雲行　孤屋

紙燭して尋て来たり酒の秋　其角

上塗なしに張て置く壁　孤屋

名ク 小栗讀む片言まぜて哀なり　其角

かふもゐつく浮世の船　孤屋

孤屋旅立ける時出来て湯入のおり
かゝりけるハ今思出ても不便にて哀なれ

其角　孤屋　各十六句

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬるくんでつかふ也　野坡
つよう降たる雨のついやむ　利牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
そくふ慮れと名をとまいらぬ　野坡
年よりた者を常住ねめまはし　利牛
いつより寒い十月のそら　桃隣
臺所けふは奇麗にはき立て　野坡
分にならるゝ嫁の仕合　利牛
はんなりと細工に染る紅うこん　桃隣
鑓持ばかりもどる夕月　野坡
時ならず念仏きこゆる盆の内　利牛
鴫まつ黒にきてあかるあり　桃隣
人の物負ねば楽な花ごゝろ　野坡
もはや弥生も十五日たつ　利牛
より平の機に出す桶へとりまぜて　桃隣
むかひの家にくされを見とがめて　野坡
買てもらふ米で身縫をまくりける　利牛
陶るかしきさう遣さうつく　桃隣
ゆゝ庭の菓ハきらし秋の露　野坡
枝の赤みり見つくしなから　利牛
同じ事老の咄しのあくどくて　桃隣
だまされて又薪部屋に待　野坡
よいやうに我まゝに占を立てる　利牛
ちやうしんらきハあそぬ商　桃隣
帷子ハ肩ふかゝらぬ暑かりく　野坡

京は惣別家に念入　利牛

焼物に組合たる富田鮓　桃隣

隙と盗んで今日をわたくる　利牛

髪置は雲踏ちらかる寮にて　野坡

先沖まではみる入舟　桃隣

内でより菜がたくて花の陰　利牛

ちらつく風のふかぬ長閑さ　野坡

神無月廿日深川にて即興

振賣の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉

降てはやすみ時雨する軒　野坡

番匠が樫の小節を引かねて　孤屋

片はげ山に月をみるかな　利牛

好物の餅を絶さぬ秋の風　野坡

割木の安き國の露霜　芭蕉

網の者近づき舟に聲かけて　利牛

星さへ見えず二十八日　孤屋

ひだるきは殊軍の大事也　芭蕉

淡氣の雪に雑談もせぬ　野坡

明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋

肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛

上をきの干葉刻むもうはの空　野坡

馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉

絈(カセ)買の七つさがりを音づれて　利牛

塀に門ある五十石取　孤屋

此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉

砂に暖のうつる青草　野坡

新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋

吹とられたる笠とりに行　利牛

川越の帯しの水をあぶながり　野坡

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉

干物を日向の方へいざらせて　利牛

塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋

算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉

又沙汰なしにむすめ産(ヨロコブ)　野坡

どたくたと大晦日も四つの鐘　孤屋

分家のこのむ状の條先　利牛
中よくて傍輩合の借いらひ　野坡
壁をたゝきて寝せぬ夕月　芭蕉
風やみて秋の鴎の尻さがり　利牛
鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉
目黒まいりのつれのねちみやく　野坡
どたくたも花の三月中時分　孤屋
輪炭のちりをはらふ春風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛
各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟浜に買とりて　芭蕉
あへさとさきくる大名の供　子珊
永あくる風もふくらく蕎麦の秋　桃隣
粟をつゝむくひろき畠地　利牛
熊谷の堤きれたる秋の水　岱水

箱こしらへて鰹節うる　野坡
二三畳寝所もらふ門の脇　子珊
るの蔦ぬのさかる干魚の　水圃
竹の皮雪踏に替る夜の来て　石菊
稲子のさきる霜のちらく　杉風
あお者のひとりしこふ浦の秋　野坡
めつさうに酒のむやる奢ゑ　利合
宵〳〵の月をかこちて旅大工　依々
脊中へのぼる児をうるさく　桃隣
茶むしろのきらくよご花紫く　子珊
川からとれる小鮎いくらも家　石菊
鰯売をされて家族よるさ紙子の衿　杉風
鶯戸へ土運山へ行とち　岱水
ものゝいひみる醤くと覗る　孤屋
兄弟めてはおかき精進日　曽良
時菜を掘て俵へきこの込　桃隣
ひとくるせて茶代の礼　依々
色舟てなのくいとし自慢さきちらし　沾圃

簾へゆく火ともりく来る　子珊
又ゝれも佛の舎て塔を明　利牛
挨えのりして質とり為し　杉風
大坂の人にまれくる冬の月　利合
酒とさま桃え祖母の家に入　野坡
きゝうけぬる此みの酒のまけうき　子珊
次の小部屋でつまむせる茶　利牛
絢来にかゝて居れは媼に客れ　曽良
七つのかねに船は出にける　杉風
花の色ゆらくに月に仙姿しく　桃隣
男まゝ一つもに蓮そろうへ哉　岱水

杉風五　孤屋二　芭蕉一
子珊五　桃隣四　利牛三
岱水三　野坡三　沾圃二
石菊二　利合二　依々二
曽良二

図書館 短大 第2908號 受入 昭和30.9.

亀田甚三郎校正蔵板
嘉永四年亥六月發行
江戸製本所
日本橋西河岸町
亀田屋甚蔵
本石町十軒店
英屋大助